

学術的な研究の成果を社会と結び付けて
共創社会を実現させる



帝京大学 先端総合研究機構

Advanced
Comprehensive
Research
Organization



TEIKYO

CONTENTS

01	学長あいさつ	02
02	先端総研の目指すところ	03
03	先端総研の組織図	04
04	部門の概要	05
05	各部門における研究活動の紹介	06
	横断部門	06
	AI活用部門／ヒューマニティーズ研究部門	
	縦断部門	07
	健康科学研究部門／次世代教育研究部門／複雑系認知研究部門	
	危機管理研究部門／オープンイノベーション部門／社会連携部門	
	各部門における研究者の紹介	10
06	産学連携推進センター／研究コンプライアンス室	31
07	活動報告	32
	先端総研セミナー／学談会／広報・出版物／帝京大学出版会／	
	研究交流シンポジウム／助成金／SDGs／新産業共創セミナー／	
	オープニングセレモニー	
08	施設紹介	38
09	キャンパス案内	40

01

学長あいさつ

帝京大学は、1966年開学以来、全国5つのキャンパスに人文・社会系、自然科学系、医・薬・医療系の10学部11研究科、2学位プログラム、学生数23,000人余の総合大学へと成長を果たしており、2026年に創立60周年を迎える充実期にある大学です。建学の精神のもとに、教育理念「自分流」のもと、「実学」「国際性」「開放性」を教育指針として、自分自身で興味を見出し、個性を最大限活かすべく知識を習得し、それを自分の力として行動できる人材の育成を行うことを重要視しております。

このような半世紀におよぶ歴史の中で、本学としては、教育・研究等を通じて培った「知」を社会に向けて発信するとともに、持続可能性を高めた社会の実現のために、また、当面する様々な社会問題の解決のために、総合大学として培ってきた専門的な知見をどのように活かすべきかが問われていると考えます。

その目的を果たすべく、先端総合研究機構(略称:先端総研)が2021年4月に帝京大学のキャンパスや学部等を越えた連携の場として、また文理融合・学際的研究の拠点として創設されました。先端総研は、大学全体の研究力の向上、研究活動の活性化等を目的とし本学としては画期的な組織であります。

先端総研には、大学全体の「知」を集結させる組織として、8つの研究部門がおかれております。そのうち6研究部門は、健康科学・次世代教育・危機管理・複雑認知系等の本学が培ってきたユニークかつ特色のある分野です。これら6部門を横断かつ横串を刺す形で、AI活用部門、ヒューマニティーズ研究部門を設けたことによって、文理融合型、学際型の学内外の連携研究を目指しております。

我が国が失われた20年と称される負のスパイラルを打破し、今後とも国家として持続的に発展していくためには、テクノロジー(技術)偏重ではなく、研究開発の初期段階から社会実装化を意識することが極めて重要であり、その意味からも自然科学系、人文社会系等の様々な研究基盤の研究者が交流、意見交換を行うことは極めて重要と考えております。

先端総研では、様々な専門的知見を集合したチーム体制・協力体制で課題解決に取組み、そのプロセスを通じて、若手研究者・学生の育成や新たな学問領域の創出等を目指して参りたいと考えております。

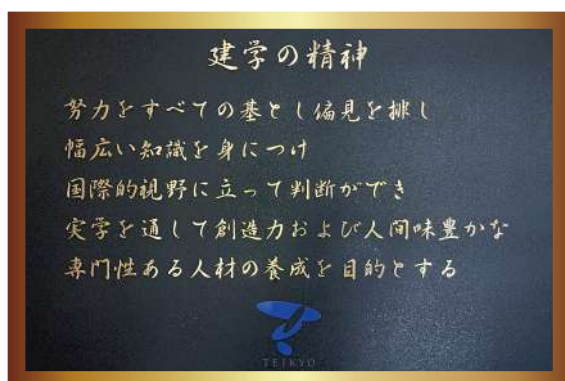
終わりに、先端総研は、ハード・ソフト面ともに素晴らしい研究環境等を活かして、学内連携に留まらず、東京大学との研究面における包括連携協定等を契機として、他大学や民間企業等との更なる連携協力・産学連携の推進に当たっての本学のコア組織として取り組むことを使命と考えております。



帝京大学 学長 冲永 佳史

先端総研の目指すところ

建学の精神、先端総合研究機構が目指すところ



■ 先端総合研究機構が目指すこと

- (1) 本機構は全学的組織とし、本学が優位性を有する領域などの重点研究領域を明示することで、既存の各センターの位置づけも明確化し、帝京大学として一体感を持った研究推進を図る。
- (2) 総合大学の強みを生かし、本学の有する貴重な研究シーズとニーズの価値を高め、大学全体としての研究力向上及び学際的研究を推進し得られた知見を様々な社会的課題の解決に役立たせる。
- (3) 本機構の創設により、社会や産業界との連携も含め、学部を越えて新しい知と学術を創生する研究連携体制の構築して、時代の先端科学を進める。

機構長・副機構長の紹介

機構長：浅島 誠(学術顧問・特任教授)

副機構長：冲永 寛子(常務理事・副学長)

岡ノ谷 一夫(教授)

中西 穂高(産学連携推進センター長・特任教授)

機構長あいさつ

先端総合研究機構は設立して3年目を迎えました。学長をはじめ教職員の皆様方のご協力のもと、文理融合型の学際的研究で社会的課題の解決を目指すという方針を掲げ、いよいよ活動が活発になってきており、成果を上げつつあります。

学内では、すべての学部や研究科等の教員や学生が参加する「研究交流シンポジウム」は今年で6回目を迎え、260を超えるポスター発表により異分野の研究者同士の交流や連携が活発になってきています。このシンポジウムを通してインキュベーション助成金・チーム研究助成金や外部資金を獲得したチーム研究の成果も上げてまいりました。また毎月実施される「先端総研セミナー」では最先端の研究成果を学部やキャンパスを超えた研究者同士で共有しています。ほかに「学談会」では普段は接することの少ない異分野の研究者同士の交流を図っています。さらに、ACRO Timesの刊行等の企画運営のみならず、産学連携推進活動やコンプライアンス研修を行っております。

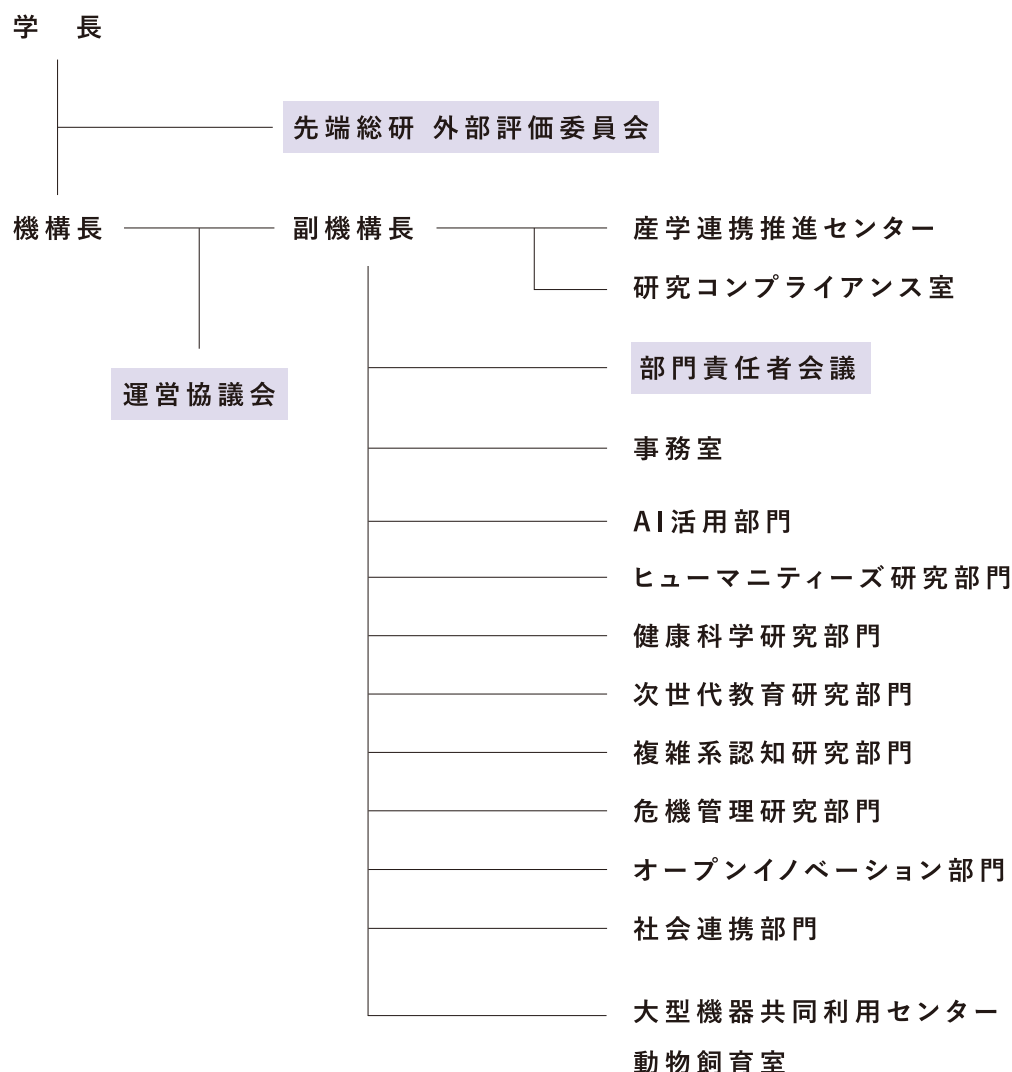
学外に向けての活動としては、「第1回新産業共創セミナー」を2022年11月に開催し多くの企業との連携に向けて動き出しました。また他大学との連携研究の推進なども始めております。

これからも学部やキャンパスを超えて学際的な新しい知と学術の創生に向けて、学内の更なる研究力の継続的な発展の向上に努めてまいります。今後ともご協力の程よろしくお願いします。



機構長 浅島 誠

先端総研の組織図



先端総研における会議体について

先端総研では、本学の持つ研究シーズとニーズの価値を高めるとともに、その知見に基づき、社会の発展に貢献し、本学の研究力を高めることを目的としており、その目的達成のために本機構の運営に関する協議・審議の場として、以下の会議体を設置しています。

部門責任者会議

本機構の構成員による実務的な運営協議・審議の場として部門責任者会議を設置。機構長を議長とし、副機構長、部門責任者が出席。会議の開催は、原則として月1回。

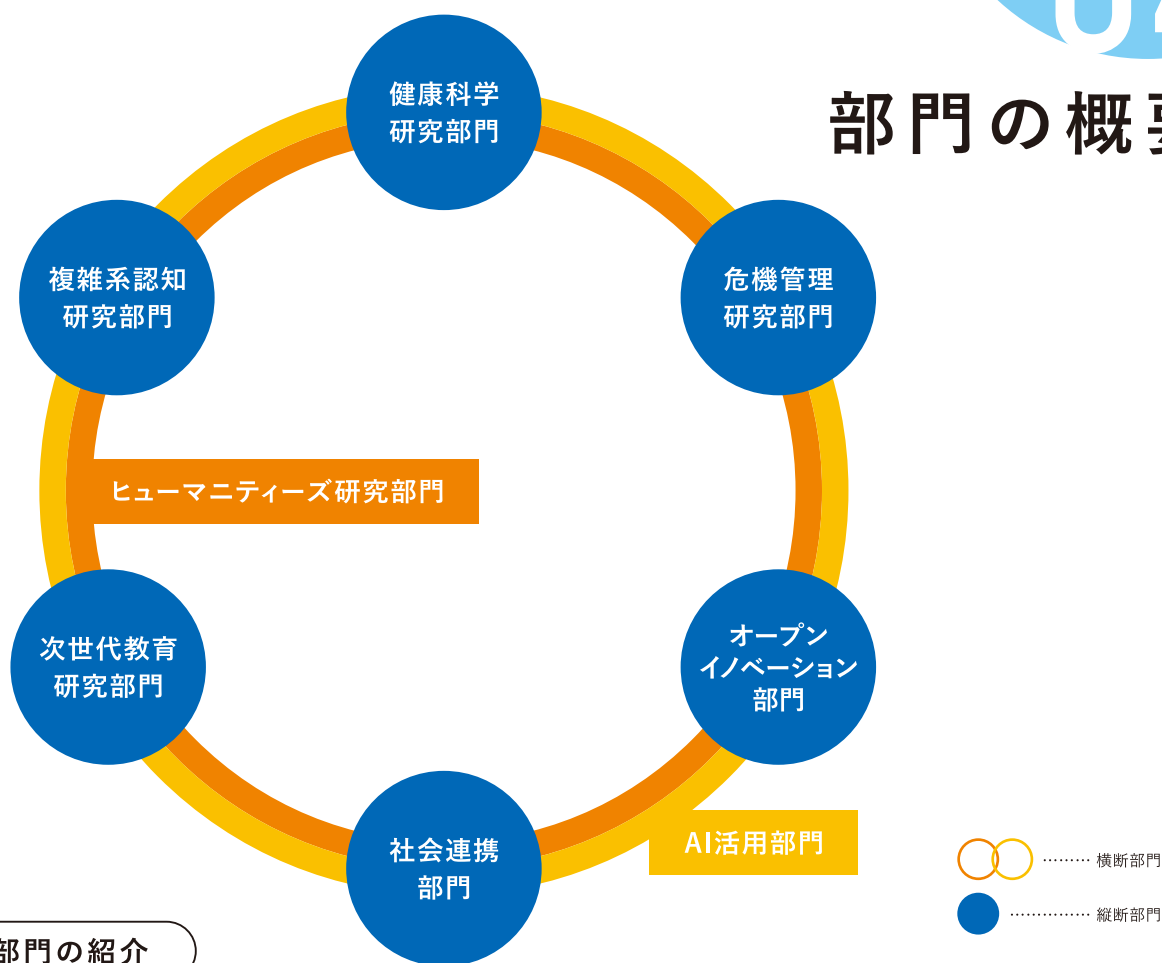
運営協議会

学内の研究シーズ、ニーズ等を把握し、本学の研究戦略の策定、本機構の目的達成に向けた効果的な運営、および教職協働の実質化が促進され、より一層の教育研究活動の質向上を図るため、運営協議会を設置。運営協議会は、機構長、副機構長、各キャンパスから学長が指名した者および事務長により構成。会議の開催は、年2回程度。

先端総研 外部評価委員会

本機構の組織運営全体に対する外部有識者からの意見を求める場として外部評価委員会を設置。外部評価委員は3名以上4名以下とし、外部有識者の中から学長が指名。会議の開催は、原則として3年1回。

部門の概要



部門の紹介

横断部門

AI活用部門

これからの社会を先取りし、AIとの共存を所与の件とする構想力や考え方を部門横断的に提供することを目的としています。個別の研究においてAI活用という新たな視点を提供する、非常に新しい観点に立った横断的な研究部門です。

ヒューマニティーズ研究部門

個々の研究の健全な展開に不可欠な価値・倫理・思想・哲学といった普遍的価値観を部門横断的に提供することを目的としています。自然科学系の価値観にのみ立脚して推進される傾向のある他部門に新たな視点を提供する、他に例のない横断的な研究部門です。

縦断部門

健康科学研究部門

「医科学からの発展」、「スポーツと健康」、「食と栄養」などをテーマとし、長寿社会において最も期待される健康(心身ともに健やかで活気に満ちた状態)の維持・増進や健康状態への回復などに取組みます。

次世代教育研究部門

認知科学、教育心理学、教育学などの知見と手法を活かして、これからの社会が求める資質(問題発見・解決能力など)を備えた人材の育成を目指し、様々な実践的教育のあり方を探る部門。

複雑系認知研究部門

「生体情報と機能」、「細胞間相互作用」、「脳、神経と認知機能」などをテーマとし、モノの相互作用が作り出す複雑さを研究対象とする複雑系科学と、複雑系の代表例とも言えるヒトの認知機能の解明に取組みます。

危機管理研究部門

「医療危機管理」、「社会生活と安全・安心」などをテーマとし、安全・安心な社会や生活環境の創出を目的として、様々な危機からの回避や安全な社会システム作りを取組みます。

オープンイノベーション部門

「エネルギー問題対応」、「フォトリソグラフィーの応用」、「情報技術の応用」、「身体運動」などをテーマとし、学外との積極的な連携により本学が有する研究シーズの社会実装を目指したり、新しいイノベーションを起こす可能性を広く学内に求めたりすることを通じ、本学が関与するイノベーション・エコシステムの構築を目指します。

社会連携部門

本学の有する「知」を社会に繋げていくため、「ベンチャー育成」、「連携促進」などの幅広い観点から、産学連携プロジェクトの発掘や知財の利活用などの各種支援業務を行うとともに、分野横断型の研究、エビデンスに基づく産学連携を進めるための実証的な研究を行う部門。

各部門における研究活動の紹介

50音順

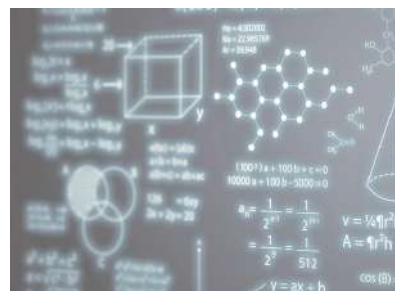
AI活用部門

● 部門責任者 甘利 俊一(P10)・城戸 隆(P11)

人工知能と未来社会デザイン:「人を幸福にするAI技術とは?」
情報科学の視点から研究する

- 脳-人間とは何か? 知能-脳-社会
- 思考・言語・意識人間・社会・文明
- AI技術の進化は人にどのような影響を及ぼすか?

数理脳科学: 脳の基本原理の探求
機械学習工学と医用人工知能技術
AI時代のデータサイエンス教育
AIと倫理: Wellbeingと公平性



ヒューマニティーズ研究部門

● 部門責任者 後藤 玲子(P12)・羽入 佐和子(P13)

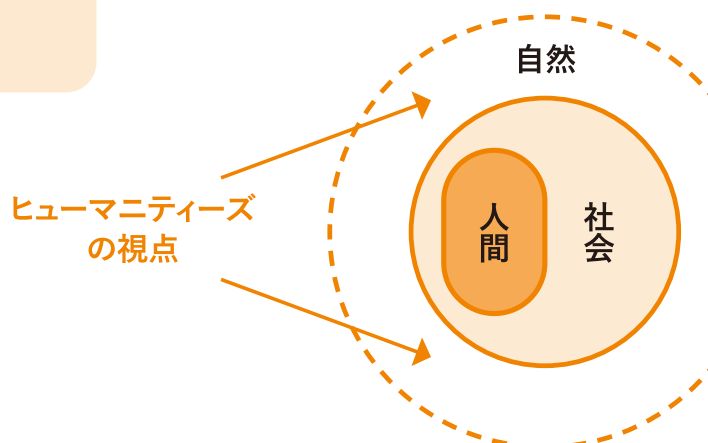
根本的な問い:「人間とは何か」を人文学・社会科学の視点から研究する

- 哲学・倫理学・宗教学の問い
- 法学・経済学・政治学・社会学・歴史学の問い
- 文学・芸術の問い 等

私は何を知ることができるか
私は何をなすべきか
私は何を望むことが許されているか
そして、人間とは何か

(I.Kant)

ヒューマニティーズ
の視点



健康科学研究部門

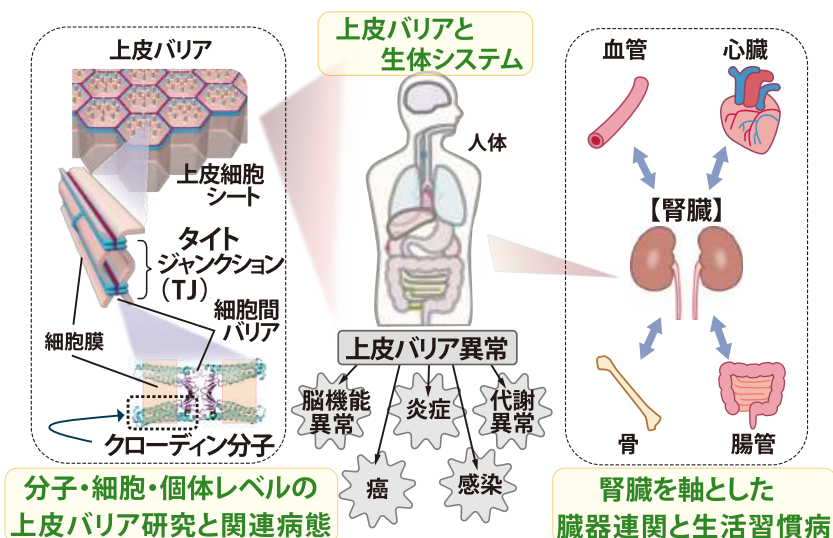
岡本 康司(P14)・柴田 茂(P15)

●部門責任者 月田 早智子(P16)・森川 真大(P17)

上皮バリアによる生体システム構築とその異常による病態および創薬の研究

上皮バリア生体システム構築とその異常による病態

- 生体システム構築とその異常による病態における上皮バリアのタイトジャンクション(TJ)とクローディン等の研究
- 腎臓を軸とした臓器連関による内部恒常性維持機構と生活習慣病の病態の研究



次世代教育研究部門

●部門責任者 市川 伸一(P18)

学校や地域と連携・協力して次世代の資質・能力を育てます



■ 深い理解を伴う習得に向けた授業

「教えて考えさせる授業」の実践

■ 自律的な学び方を育む個別支援

■ プレゼン活動を中心にした表現学習

説明文読解とプレゼン



■ 日本語知識を活用して英語を学ぶ指導法

複雑系認知研究部門

●部門責任者 浅島 誠(P19)・岡ノ谷 一夫(P20)・狩野 方伸(P21)

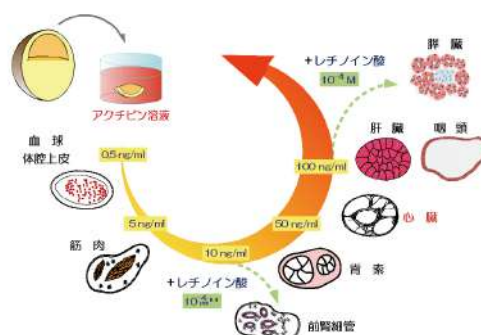
生命は階層性を持つ複雑系である。生命の発生過程とその機能としての認知を研究する。

- 動物の発生における形づくりと遺伝子ネットワークシステム
- 脳の形成過程と認知機能の発現
- コミュニケーションの進化と意識の誕生



オーガナイザーの働きはオーケストラ指揮者のようなもの

オーケストラの指揮者のように卵から親への発生を誘導する物質
このような夢の物質を求めて多くの研究者が取り組んだ



アクチビン処理したアニマルキャップから生じるおもな組織と器官

危機管理研究部門

●部門責任者 森村 尚登(P22)

救急医学・災害医学領域における危機管理体制構築のための研究、
免疫に関わる医療の発展に向けた連携研究

- 災害時における医療需要と対応力の定量指標化
- 救急医療と災害時医療における
多職種インプロヴィゼーション能力を高めるための
ゲームアプリケーションの開発
- 臨床で広く使われる新たな治療薬の開発



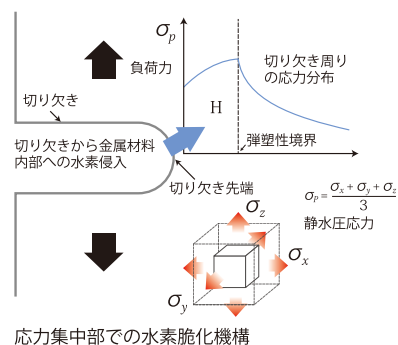
オープンイノベーション部門

● 部門責任者 跡見 順子(P23)・植田 利久(P24)・光石 衛(P25)
山下 紘正(P26)・横堀 壽光(P27)

■ マルチスケール力学による材料破壊現象の予測 (材料強度・力性学研究分野)

研究項目

1 エネルギー技術	2 航空機・自動車	3 医工学
- 水素エネルギー - 高効率発電	- 航空機ジェットエンジン - 燃料電池車	- 心臓血管外科領域 - 整形外科領域



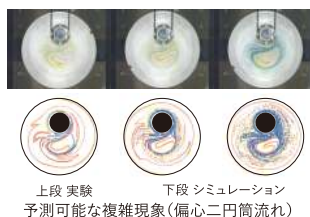
■ 反応熱流体イノベーション

非定常、非線形、非平衡への展開

非定常: 過渡変動、周期変動、乱流

非線形: リミットサイクル⇒倍周期化⇒カオス

非平衡: 反応機構、輸送現象



エネルギー・環境イノベーション

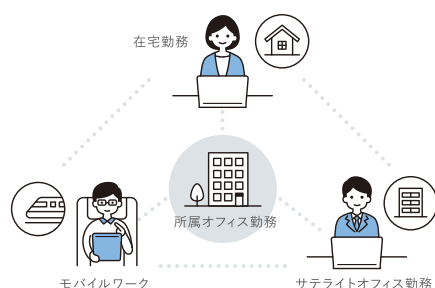
H ₂	- 水から水素を造る - 工業燃焼装置で水素を使う
CH ₄ Hydrate	天然ガスの輸送に使う
CO ₂ Hydrate	二酸化炭素の回収・貯蔵を進める
Bio Fuel	輸送機器の燃料に使う



社会連携部門

● 部門責任者 田沼 唯士(P28)・中西 穂高(P29)

大学の研究成果を社会・産業界の課題解決に役立てるための研究を実施



テレワークやクラウドソーシングなどの新しい働き方の研究

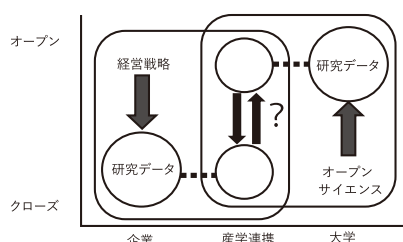


バイオマス発電性能向上



自然エネルギー利用

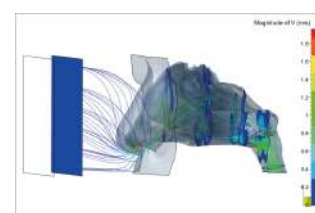
二酸化炭素を出さないで産業を発展させるための研究



産学連携における研究データの利活用に関する研究



病気の治療のために呼吸や血液の流れを調べる研究



鼻から喉への呼吸の流れのシミュレーション

各部門における研究者の紹介

※各部門内は50音順で表記



AI活用部門

[職位・名前]

特任教授 **甘利 俊一** AMARI Shun-ichi

[専門分野]

数理工学分野、理論脳科学分野

[最終学歴]

東京大学大学院
数物系研究科応用物理学専攻博士課程修了

[職歴]

年	月	内容
1963年	4月	九州大学工学部通信工学科 助教授 (1967年3月まで)
1967年	4月	東京大学工学部計数工学科 助教授 (1981年3月まで)
1981年	3月	東京大学工学部計数工学科 教授 (1996年3月まで)
1994年	4月	理化学研究所国際フロンティア 情報処理グループ グループディレクター (1997年9月まで)
1997年	4月	Leuven大学 Neural Networks講座 教授 (1998年3月まで)
1997年	10月	理化学研究所脳科学総合研究センター グループディレクター (2003年～2008年 センター長) (2017年3月まで)
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 特任教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
1995年～1999年	Bernoulli学会 理事
1996年1月～1996年12月	国際神経回路網学会 会長
1997年～2000年	日本学術会議 会員
2004年4月～2005年3月	電子通信学会 会長

[研究内容]

数理科学全般、特に情報幾何学、数理脳科学、人工知能に力を入れています。
情報幾何学は、確率分布族のなす多様体の不変な幾何学構造の探求に始まり、ここにリーマン計量と二つ双対のアフィン接続を導入しました。特に双対平坦になるリーマン構造の場合に拡張ピタゴラスの定理と二つの射影定理が成立します。これは情報のみならず物理を含む多くの分野で有効な方法を与えます。数理脳科学は、神経回路網の数理解モデルを構築し、その特性を数理の力で解明するもので、統計神経力学、神経学習理論、神経場の力学理論など、多岐にわたって発展しています。人工知能は、多層の神経回路網を用いた学習システムです。これは予想を超える性能を発揮していて、未だに理論が追いついていないと言え難いです。深層学習の理論を数理の立場から明らかにしたいと考えています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
1965年	5月	電気通信学会 論文賞
1987年		電子情報通信学会 論文賞
1992年		IEEE Neural Networks Pioneer賞
1995年		日本学士院賞
1997年		IEEE Piore賞
2010年		INNS Gabor賞
2012年		文化功労者
2019年		文化勲章

[主な著作]

著作名	年
神経回路網の数理	1978年
Information Geometry and Its Applications	2016年
脳・心・人工知能	2016年



AI活用部門

〔職位・名前〕

教授 城戸 隆 KIDO Takashi

〔専門分野〕

人工知能、遺伝子解析

〔最終学歴〕

慶應義塾大学大学院
理工学研究科計算機科学専攻博士課程修了

〔職歴〕

年	月	内容
1996年	4月	NTT 情報通信研究所 研究員 知的エージェント通信方式研究グループ
1997年	7月	NTT 国際本部 主査 マルチメディアスーパーコリドー (MSC) プロジェクト
1997年	12月	NTT MSC (NTT Communication) Research Manager
2001年	7月	NTT サイバースペース研究所 情報ベースプロジェクト 研究主任
2002年	5月	Hubit Genomics Inc. Senior Scientist
2006年	4月	スタンフォード大学医学部 客員研究員
2009年	4月	株式会社理研ジェネシス 研究マネージャー (JST さきがけ「情報環境と人」領域 研究員)
2017年	1月	株式会社 Preferred Networks リサーチャー
2020年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授 (現在に至る)

〔学会活動〕

年	内容
2012年～2019年	AAAI (米国人工知能学会) Spring Symposium Organizing Chair
2020年～2022年	JST 未来社会創造事業 「個人に最適化された社会の実現」 領域 評価委員
2022年	IEEE Big Data Cup Challenge 2022, chair

〔研究内容〕

人工知能と遺伝子解析が専門です。生命と情報の境界領域の開拓を目指し、様々な疾患原因の解明や診断、治療に役立つ手法を開拓していくことに継続して取り組んできました。「人に気づきを与えるパーソナルゲノム情報環境」を提案しています。個人のゲノム情報から病気のリスクや個性を予測し、病気の原因解明、新たな科学発見につながる技術です。2020年から、帝京大学に移籍し、「AIやデジタル情報環境が人間の認知や感性、健康 (Well-being) にどのような影響を及ぼすのか?」、「幸福とは何か?人を幸福にする技術とは?」といった Well-being AIやAI倫理に関わる問題意識を強く感じるようになり、認知バイアスの理解に基づく個別化データサイエンス教育の提案 (AI時代のフェイクニュース研究) や「AIと人: 人類の未来と幸福」の研究にも着手しています。新領域開拓を目指し AAAI 国際シンポジウムを継続的に主催しています。

〔受賞歴〕

年	月	受賞名
2019年	7月	人工知能学会 AI ELSI 賞 最終候補

〔主な著作〕

著作名	年
遺伝的アルゴリズムを用いたハイブリッド探索、北野宏明 (編集)、遺伝的アルゴリズム I、第三章	1993年
数学でみた生命と進化 一生き残りゲームの勝者たち (ブルーバックス) (分担翻訳)	1996年
ゲノムが語る自分探し —僕はどんなふうに生きるのだろうか—	2011年
Systematic evaluation of personal genome services for Japanese individuals, Journal of Human Genetics	2013年
AI導入によるバイオテクノロジーの発展、第2章、遺伝子解析と AI 技術を用いたパーソナルゲノム情報環境	2018年
Are minor alleles more likely to be risk alleles?, BMC Medical Genomics	2018年



ヒューマニティーズ研究部門

〔職位・名前〕

教授(兼任) **後藤 玲子 GOTOH Reiko**

〔専門分野〕

経済・哲学

〔最終学歴〕

一橋大学大学院経済学研究科
理論経済学専攻博士課程修了 博士(経済学)

〔職歴〕

年	月	内容
1996年	4月	社会保障研究所 研究員 (1996年12月まで)
1996年	12月	国立社会保障・人口問題研究所 室長 (2004年3月まで)
2004年	4月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授(2013年3月まで)
2013年	4月	一橋大学経済研究所 教授
2021年	4月	一橋大学 名誉教授
2021年	4月	帝京大学経済学部 教授
2022年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授(兼任) (現在に至る)

〔研究内容〕

専門は規範経済学です。哲学と数理を基盤とし、経済と正義を主題とし、理論と実証を架橋します。これまで社会的選択理論、分配的正義、福祉国家の再構築、社会科学の方法などについて執筆してきました。目下のテーマは、「互酬するケイパビリティ」と「脱一元化・脱序列化社会」です。「ありのままの個人」から「ありうべき制度」を構築するための「しかけ」を求めて、日々、キャンパスをうろつき廻り、異分野との対話を試み、日常と非日常の深遠な境目をのぞき込んでいます。学際的・国際的な協同研究のモットーは、「＜異＞を包み込みながらも＜同＞にはしない、全体性と階層性を回避する不思議な集まり」です。先端総合研究機構は、個人の多様性こそを資産として、人類の直面する難問(アポリア)に果敢に挑戦するための拠点です。個々人の知と経験が、学生たちの意欲と関心を媒介として、自在に飛び交い、実り合うよう、最善を尽くしたいと思います。

〔学会活動〕

年	内容
1998年4月～現在	日本経済学会 会員
2002年9月～現在	日本法哲学会 会員
2003年8月～現在	Human Development & Capability Association (HDCA) fellow
2004年～現在	Society for Social Choice and Welfare member
2018年～2022年	JSPS基盤研究S研究分担
2019年～2023年	JSPS基盤研究A研究代表
2020年～2023年	国際共同研究加速基金研究B分担
2022年～2025年	JSPS基盤研究C研究分担
2022年～2026年	JSPS基盤研究B研究分担
2022年7月～2027年	JSTムーンショットプロジェクト コア研究目標9課題 推進者
2023年～2027年	学術変革A「尊厳学の確立：尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて」(研究分担) 「ケイパビリティ毀損と人間の尊厳—福祉経済政策の倫理と哲学—」(研究代表)

〔主な著作〕

著作名	年
アマルティア・セン：経済学と倫理学(共著)	2001年
正義の経済哲学：ロールズとセン	2002年
福祉の公共哲学(共編著)	2004年
福祉と正義(共著)	2008年
Against Injustice: The New Economics of Amartya Sen	2009年
ノマド・逃がす・ケイパビリティ(共編著)	2013年
福祉の経済哲学	2015年
正義(共編著)	2016年
潜在能力アプローチ—倫理と経済—	2017年
新・世界の社会福祉第6巻 アメリカ、カナダ(共編著)	2019年
The Ethics and Economics of the Capability Approach	2020年
尊厳と生存(共編著)	2022年
責任という倫理(共編著)	2023年
Dignity, Freedom and Justice,	2023年(近刊)



ヒューマニティーズ研究部門

〔職位・名前〕

特任教授 **羽入 佐和子 HANYU Sawako**

〔専門分野〕

哲学

〔最終学歴〕

お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化研究科
比較文化学専攻修了 学術博士

〔職歴〕

年	月	内容
1984年	4月	お茶の水女子大学文教育学部 講師 (1990年3月まで)
1990年	4月	同大学文教育学部 助教授 (1994年3月まで)
1994年	4月	同大学大学院人間文化研究科 教授 (2009年3月まで)
2005年	4月	お茶の水女子大学 副学長、 附属図書館長 (2009年3月まで)
2009年	4月	お茶の水女子大学 学長 (2015年3月まで)
2015年	4月	理化学研究所 理事 (2016年3月まで)
2016年	4月	国立国会図書館 館長 (2020年4月まで)
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 特任教授 (現在に至る)

〔学会活動〕

年	内容
1998年～2015年	比較思想学会 理事
1998年～2015年	実存思想協会 理事
	日本哲学会 会員
	日本倫理学会 会員
	科学基礎論学会 会員 等
2001年～2006年	International Association of Jaspers Societies 理事
2009年～2015年	日本ヤスパーズ協会 理事長

〔研究内容〕

専門は哲学。特にヤスパーズの哲学を中心に研究しています。ヤスパーズ哲学では、科学的思考と哲学的思考との関係を意識しつつ、歴史的状況の中にある人間の存在や、文化の違いを超越する存在概念の探究など広範な議論がなされています。科学技術と社会とのかかわりが議論されている現代の状況においては、哲学的思考の意義を問うことは一つの重要な課題といえます。

そこで、哲学の思惟としての理性（Vernunft）や、人間存在の概念としての実存（Existenz）の意味を再検討し、人間存在とは何かを改めて考察することを目指しています。これまでの研究では、ヤスパーズ哲学の「存在の概念」、「実存の哲学」、「交わり（Kommunikation）」等に注目して、存在が多様に語られることの意味や、情報化時代の人間存在の意義、実存的で理性的なコミュニケーションの可能性について現代の社会状況との関連で考察してきました。

これらの研究を踏まえて、新たに、AIとの関係に象徴される人間を取り巻く状況の分析と解明を試みています。

〔主な著作〕

著作名	年
女性と文化Ⅱ（共著）	1981年
ヤスパーズの存在論	1996年
哲学へーヤスパーズとともに（共著）	1996年
科学に学ぶ心の教育 第7巻（共著）	1999年
思考のレシピ	2014年



健康科学研究部門

[職位・名前]

教授 岡本 康司 OKAMOTO Koji

[専門分野]

分子腫瘍学

[最終学歴]

東京大学大学院

医学系研究科生化学専攻博士課程修了

[職歴]

年	月	内容
1986年	6月	東京大学附属病院内科 研修医 (1988年 3月まで)
1991年	5月	米国コールドスプリングハーバー 研究所 研究員 (1996年 1月まで)
1996年	2月	米国コロンビア大学生物学部 研究員 (2000年 3月まで)
2000年	4月	国立がんセンター研究所 放射線研究部 室長 (2008年 3月まで)
2008年	4月	国立がんセンター研究所 早期がん研究プロジェクト 室長 (2010年 10月まで)
2010年	11月	国立がん研究センター研究所 がん分化制御解析分野 分野長 (2022年 3月まで)
2022年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
2002年 5月～現在	日本癌学会 会員
2003年 8月～現在	日本分子生物学会 会員
2014年 1月～現在	日本癌学会 評議員
2015年 6月～現在	がんと代謝研究会 実行委員
2017年 2月～現在	がん三次元培養研究会 代表幹事
2020年 12月～現在	日本プロテインフォスファターゼ 学会 世話人

[研究内容]

最近の分子標的治療やがん免疫療法のおかげで、がん治療に格段の進歩が見られますが、依然多くのがんは治療抵抗性を示します。がん細胞はその生存増殖のために周囲の細胞と精緻なネットワークを構成していますが、そのような細胞ネットワークの理解ががん治療抵抗性のメカニズムを明らかにするために重要と考え、研究を続けています。そのために、シングルセル解析や組織レベルのオミクス解析などの新たな方法論を用いて、治療抵抗性を1細胞レベルで明らかにし、「治療抵抗性ニッチ領域」を可視化する事を目指しています。これらの方法論は、がんだけでなく様々な難治性疾患の理解や治療法構築にも有用であり、臨床や企業で研究を行う先生方と共同で研究を進めていければと考えています。

[主な著作]

著作名	年
A novel octamer binding transcription factor is differentially expressed in mouse embryonic cells. Okamoto K et al. Cell 60, 461-472.	1990 年
Cyclin G is a transcriptional target of the p53 tumor suppressor protein. Okamoto K and Beach D EMBO J. 13, 4816-4822.	1994 年
Cyclin G Recruits PP2A to Dephosphorylate Mdm2. Okamoto K et al. Molecular Cell 9, 761-771.	2002 年
miR-493 induction during carcinogenesis blocks metastatic settlement of colon cancer cells in liver. Okamoto K et al. EMBO J. 31, 1752-1763.	2012 年
Induction of the stem-like cell regulator CD44 by Rho kinase inhibition contributes to the maintenance of colon cancer-initiating cells. Ohata H, (中略), Okamoto K Cancer Res. 72, 5101-5110.	2012 年
Establishment and characterization of an <i>in vitro</i> model of ovarian cancer stem-like cells with an enhanced proliferative capacity. Ishiguro T, (中略), Okamoto K Cancer Res. 76, 150-160.	2016 年
The Induction of Selected Wnt Target Genes by Tcf1 Mediates Generation of Tumorigenic Colon Stem Cells. Shiokawa D, (中略), Okamoto K Cell Rep. 19, 981-994.	2017 年
NOX1-Dependent mTORC1 Activation via S100A9 Oxidation in Cancer Stem-like Cells Leads to Colon Cancer Progression. Ohata H, (中略), Okamoto K. Cell Rep. 28 : 1282-1295.	2019 年
Slow-Cycling Cancer Stem Cells Regulate Progression and Chemoresistance in Colon Cancer. Shiokawa D, (中略), Okamoto K Cancer Res. 80 : 4451-4464.	2020 年
PROX1 induction by autolysosomal activity stabilizes persister-like state of colon cancer via feedback repression of the NOX1-mTORC1 pathway. Ohata H, (中略), Okamoto K Cell Rep. 10.1016/j.celrep.2023.112519.	2023 年



健康科学研究部門

[職位・名前]

教授(兼任) **柴田 茂 SHIBATA Shigeru**

[専門分野]

腎臓内科学分野、高血圧学分野、生活習慣病

[最終学歴]

東京大学大学院医学系研究科
内科学専攻 医学博士課程修了

[職歴]

年	月	内容
1999年	4月	虎の門病院 内科レジデント
2001年	6月	公立昭和病院救急医学科 腎臓内科レジデント
2007年	4月	東京大学医学部附属病院 腎臓内分泌内科 医員
2010年	2月	Yale University, Department of Genetics 博士研究員
2014年	4月	帝京大学医学部内科学講座(腎臓) 准教授
2018年	4月	同教授
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授(兼任) (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
2000年～現在	日本内科学会 会員(認定内科医、総合内科 専門医、指導医、評議員)
2001年～現在	日本腎臓学会 会員(腎臓専門医、指導医、 評議員)
2003年～現在	日本透析医学会 会員(透析専門医、 指導医)
2007年～現在	日本高血圧学会 会員(高血圧専門医、 指導医、評議員、理事)
2016年～現在	日本痛風・尿酸核学会 会員(評議員)
2016年～現在	日本内分泌学会 会員
2020年～現在	日本アフェリシス学会 会員
2021年～現在	日本生活習慣病学会 会員(評議員)
2022年～現在	日本心血管内分泌代謝学会 会員
2014年～現在	アメリカ腎臓学会 会員(Fellow of the American Society of Nephrology; FASN)
2017年～現在	アメリカ心臓病協会 会員(Fellow of the American Heart Association; FAHA)

[研究内容]

ヒトの生命活動を支える様々な生体内システムの中で、外的環境の変化に対応して体液量と組成を一定に保つ働きを持つ働きを有するのが、腎臓です。脊椎動物が海から陸へと生活の場を広げたのは約4億年前とされていますが、人間の祖先は変動の大きい陸上生活に適応するため、長い年月をかけて腎臓の働きによる巧緻な体液調節系を発達させてきたと考えられます。一方で、食生活の近代化等、進化の時間軸に比し急速な環境変化を契機として発症するのが、いわゆる生活習慣病です。高血圧・慢性腎臓病・痛風・糖尿病といった疾患では、生命が時間をかけて構築してきた巧緻なシステムがむしろ仇となり、体液の恒常性が脆弱化したものと捉えることができます。私達の研究室では、このような生活習慣病の病態を、“腎臓の適応異常”という観点から解析し、治療や予防に有用な所見を集積することを目的として研究を行っています。

[受賞歴]

年	受賞名
2009年	東京大学医師会 医学賞
2009年	CKD award 最優秀賞
2014年	成人血管病研究振興財団 岡本研究奨励賞
2015年	日本腎臓学会 大島賞
2015年	日本高血圧学会 学術賞
2015年	日本応用酵素協会 VBIC 最優秀賞
2019年	American Journal of Hypertension John Laragh Research Award
2020年	帝京大学冲永荘一 学術文化功労賞

[主な著作]

著作名	年
【教科書】 Hypertension : A Companion to Braunwald's Heart Disease. (分担執筆)	2017年
【論文】 Fever and anuria. Lancet.	2003年
Modification of mineralocorticoid receptor function by Rac1 GTPase: implication in proteinuric kidney disease. Nat Med.	2008年
Rac1 GTPase in rodent kidneys is essential for salt-sensitive hypertension via a mineralocorticoid receptor-dependent pathway. J Clin Invest.	2011年
Kelch-like 3 and Cullin 3 regulate electrolyte homeostasis via ubiquitination and degradation of WNK4. Proc Natl Acad Sci.	2013年
Mineralocorticoid receptor phosphorylation regulates ligand binding and renal response to volume depletion and hyperkalemia. Cell Metab.	2013年
Angiotensin II signaling via protein kinase C phosphorylates Kelch-like 3, preventing WNK4 degradation. Proc Natl Acad Sci.	2014年
ULK1 phosphorylates and regulates mineralocorticoid receptor. Cell Rep.	2018年
Calcineurin dephosphorylates Kelch-like 3, reversing phosphorylation by angiotensin II and regulating renal electrolyte handling. Proc Natl Acad Sci.	2019年
SGLT2 inhibition attenuates the dysregulation of Kelch-like 3 and Na-Cl cotransporter in obese diabetic mice. J Am Soc Nephrol.	2019年
Role of pendrin in the pathophysiology of aldosterone-induced hypertension. Am J Hypertens.	2019年
Urinary phosphate-containing nanoparticle contributes to inflammation and kidney injury in a salt-sensitive hypertension rat model. Commun Biol.	2020年
Selenium associates with response to erythropoiesis- stimulating agents in hemodialysis patients. Kidney Int Rep.	2022年



健康科学研究部門

〔職位・名前〕

教授 月田 早智子 TSUKITA Sachiko

〔専門分野〕

分子細胞生物学、個体機能学、上皮バリア学

〔最終学歴〕

東京大学大学院医学系研究科 医学博士

〔職歴〕

年	月	内容
1983年	4月	東京大学大学院医学系研究科 日本学術振興会 奨励研究員
1986年	4月	東京都臨床医学総合研究所 研究員
1989年	4月	岡崎国立共同研究機構 生理学研究所 助手
1994年	4月	京都大学医療技術短期大学部 教授
2003年	4月	京都大学医学部保健学科 教授
2007年	4月	大阪大学大学院生命機能研究科 医学系研究科 教授
2019年	4月	大阪大学大学院生命機能研究科 特任教授
2019年	4月	帝京大学戦略的イノベーション研究 センター 教授
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授 (現在に至る)

〔学会活動〕

年	内容
1983年～現在	日本細胞生物学会 会員
1990年～現在	日本解剖学会 会員
2000年～現在	日本生化学会 会員 評議員
2000年～現在	日本分子生物学会 会員
2000年～現在	ASCB (The American Society for Cell Biology) 会員
2012年～2016年9月	京都大学再生医科学研究所 諮問会議委員
2016年10月～ 2022年3月	京都大学ウイルス・再生医科学研 究所 諮問会議委員
2019年～現在	日本学術会議 連携会員
2022年～現在	国立研究開発法人 AMED 研究者 育成支援研究奨励事業委員
2022年4月～現在	京都大学医生物学研究所 諮問会議委員

〔研究内容〕

月田研究室では上皮バリア学の基礎研究から医療応用への展開に取り組んでいます。私たちのからだは上皮バリアで区画化され、生体コンパートメントとして機能しています。しかし、上皮細胞がタイトジャンクション (TJ) による強い接着で細胞間

バリアを形成する“接着剤”の存在と機能は、長く“謎”でした。私共の研究でその謎の多くは解明されました。TJ の構造を確保して精製する手法を開発したことで、ZO-1、オクルーディン、そしてクローディン (Cldn) が同定されました。

また、電子・光学顕微鏡を多用する分子細胞生物学と個体機能解析学を融合した独自の視点で、Cldn の分子構造を解明し、TJ 分子構築モデルを提出し、検証中です。Cldn の 27ファミリーメンバーの同定やその発現と機能の多様性、Cldn の重合による TJ 構築制御機構などの分子・細胞レベルの研究に加え、Cldn 発現異常による病態マウス研究も推進してきました。現在、随所で Cldn 抗体による抗がん剤が実用化の途上にあります。今後、TJ・クローディンを軸に、上皮バリア学の基礎研究から医療応用への新展開および操作法の開拓を目指していきます。

〔受賞歴〕

年	月	受賞名
1988年	6月	瀬藤賞
2012年	4月	科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞 (研究部門)
2014年	7月	大阪大学総長顕彰 (研究部門)
2015年	4月	東レ科学技術賞

〔主な著作〕

著作名	年
Isolation of cell-to-cell adherens junctions from rat liver	1989年 <i>J Cell Biol</i>
Odf2-deficient mother centrioles (後略)	<i>Nat Cell Biol</i> 2005年
ZO-1 and ZO-2 independently determine where claudins are polymerized in tight-junction (後略)	2006年 <i>Cell</i>
Coordinated ciliary beating requires Odf2-mediated polarizaion of basal bodies via basal feet	2012年 <i>Cell</i>
Crystal structure of a claudin provides (後略)	<i>Science</i> 2014年
月田承一郎が遺したもの	<i>生体の科学</i> 2015年
The claudins : From tight junctions to biological systems	2019年 <i>Trends Biochem Sci</i>
クローディンを基盤とするタイトジャンクションと生体システム構築の多様性	2020年 <i>膜タンパク質工学ハンドブック</i>
A microtubule-LUZP1 association around tight junction promotes epithelial cell apical constriction	2021年 <i>EMBO J</i>
液 - 液相分離による上皮バリア制御 (略)	<i>実験医学</i> 2023年
Parallel cryo electron tomography (後略)	<i>Nat Method</i> 2023年
Phase separation of an actin nucleator by junctional microtubules (後略)	2023年 <i>Science Adv</i>



健康科学研究部門

[職位・名前]

准教授 **森川 真大 MORIKAWA Masato**

[専門分野]

実験病理学、病態医化学、腫瘍生物学

[最終学歴]

東京大学 大学院医学系研究科
病因・病理学専攻 博士課程修了

[職歴]

年	月	内容
2004年	4月	公立昭和病院 臨床研修医 (2005年3月まで)
2005年	4月	東京大学医学部附属病院 臨床研修医 (2006年3月まで)
2006年	4月	東京大学医学部附属病院血液・腫瘍内 科 専門研修 (2007年3月まで)
2012年	4月	スウェーデン王国ウプサラ大学 ルートヴィヒ癌研究所 博士研究員 (2015年12月まで)
2016年	1月	東京大学大学院医学系研究科 病因・病理学専攻 助教 (2022年3月まで)
2022年	4月	帝京大学先端総合研究機構 准教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
2004年8月～現在	日本内科学会
2007年11月～現在	日本分子生物学会
2016年4月～現在	日本癌学会
2018年9月～現在	日本生化学会

[研究内容]

トランスフォーミング増殖因子 (TGF- β) ファミリー分子は発生や細胞の分化で重要な役割を果たしますが、心血管系異常、骨形成異常、腫瘍形成などの多様な病態に関与することも知られています。これまで、TGF- β ファミリーの異常が関係する病態の中で、肺高血圧症などの血管病や、肺がん・乳がんの悪性化の分子機構に関する研究を行ってきました。最近では、TGF- β ファミリーの一つであるミオスタチンを標的にした新規ミオスタチン阻害薬を報告しましたが、骨格筋萎縮・筋力低下に対する治療薬として有望と考えています。帝京大学では、これまで行ってきた基礎研究の成果を基盤に、病態の解明や治療法の開発・改良に貢献する研究を進めています。特に、加齢に伴う骨格筋萎縮・筋力低下という高齢化社会が抱える課題に取り組みたいと考えています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
2011年	3月	2010年度東京大学大学院 医学系研究科 博士課程総代
2011年	5月	第9回国際 HHT オスラー病学会 若手最優秀口演賞受賞
2021年	7月	FASEB SRC, TGF- β Superfamily 優秀口演賞受賞

[主な著作]

著作名	年
ChIP-seq reveals cell type-specific binding patterns of BMP-specific Smads and a novel binding motif	2011年
BMP Sustains Embryonic Stem Cell Self-Renewal through Distinct Functions of Different Krüppel-like Factors	2016年
JUNB governs a feed-forward network of TGF β signaling that aggravates breast cancer invasion	2018年
The ALK-1/SMAD/ATOH8 axis attenuates hypoxic responses and protects against the development of pulmonary arterial hypertension	2019年
Systemic administration of monovalent follistatin-like 3-Fc-fusion protein increases muscle mass in mice	2021年



次世代教育研究部門

〔職位・名前〕

特任教授(兼担) **市川 伸一** ICHIKAWA Shin'ichi

〔専門分野〕

認知心理学、教育心理学

〔最終学歴〕

東京大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程中退
文学博士（東京大学、論文博士、1988年3月）

〔職歴〕

年	月	内容
1980年	10月	埼玉大学経済短期大学部 専任講師 (1983年12月まで)
1984年	1月	同 助教授 (1988年10月まで)
1988年	11月	東京工業大学工学部教職課程 助教授 (1990年3月まで)
1990年	4月	東京工業大学大学院総合理工学研究科助教授 (1994年3月まで)
1994年	4月	東京大学教育学部教育心理学科 助教授 (1999年2月まで)
1999年	3月	同 大学院教育学研究科教育心理学コー ス 教授 (2019年3月まで)
2011年	4月	同 研究科長 (2013年3月まで)
2019年	4月	同 客員教授 (2020年4月まで)
2019年	4月	帝京大学中学校・高等学校 校長補佐 (2022年11月まで)
2021年	9月	帝京大学先端総合研究機構 特任教授 (兼担) (現在に至る)
2022年	12月	帝京大学中学校・高等学校 校長 (現在に至る)

〔学会活動〕

年	内容
1977年4月～現在	日本心理学会 会員
1980年4月～現在	日本教育心理学会 会員
1982年4月～現在	日本認知科学会 会員
1988年4月～現在	日本教育工学会 会員
2000年9月～2003年9月	日本教育心理学会 理事長
2007年7月～2011年6月	日本心理学諸学会連合 理事長
2018年4月～現在	日本教育実践学会 会員
2019年4月～現在	同 理事
2022年4月～現在	同 副編集委員長

〔研究内容〕

30代までの基礎研究は、視覚的記憶能力の測定、視覚的パターンの複雑性認知、確率的推論におけるバイアスなどです。その後、教科学習に悩みをもつ児童生徒への学習相談室を大学に開設し、「認知カウンセリング」という実践的研究活動を始めました。その知見や経験から、算数・数学の学力診断テスト COMPASS (componential assessment) の開発、学習方法の改善を図るための生徒向け「学習法講座」の実施、教授と活動のバランスに配慮しつつ意味理解やメタ認知を促す授業設計論としての「教えて考えさせる授業(OKJ)」の研修などの活動を最近は行っています。

〔受賞歴〕

年	月	受賞名
1990年	6月	日本認知科学会 第1回論文賞
2008年	7月	日本認知心理学会 第4回独創賞
2018年	6月	日本認知科学会 フェロー授与

〔主な著作〕

著作名	年
考えることの科学：推論の認知心理学への招待	1997年
確率の理解を深める：3囚人問題とその周辺	1998年
開かれた学びへの出発：21世紀の学校の役割	1998年
学ぶ意欲の心理学	2000年
学力低下論争	2002年
学ぶ意欲とスキルを育てる	2004年
「教えて考えさせる授業」を創る	2008年
勉強法の科学：心理学から学習を深める	2013年
教えて考えさせる算数・数学	2015年
授業からの学校改革	2017年
教育心理学の実践ベース・アプローチ (編著)	2019年
「教えて考えさせる授業」を創る アドバンス編	2020年
これからの学力と学習支援	2023年



複雑系認知研究部門

〔職位・名前〕

機構長、特任教授、学術顧問

浅島 誠 ASASHIMA Makoto

〔専門分野〕

発生生物学、動物科学、再生科学

〔最終学歴〕

東京大学大学院理学系研究科

動物学専攻博士課程修了

〔職歴〕

年	月	内容
1972年	4月	ドイツ・ベルリン自由大学分子生物学研究所 研究員
1974年	10月	横浜市立大学文理学部 助教授
1985年	1月	同 教授
1993年	4月	東京大学教養学部 教授
1996年	4月	東京大学大学院総合文化研究科 教授
2003年	2月	東京大学大学院総合文化研究科長 教養学部 部長
2007年	4月	東京大学 副学長 理事
2011年	10月	独立行政法人日本学術振興会 理事
2014年	4月	独立行政法人産業技術総合研究所 名誉フェロー 兼幹細胞工学研究 センター長
2016年	4月	東京理科大学 副学長
2018年	4月	帝京大学特任教授・学術顧問
2023年	4月	帝京大学先端総合研究機構 機構長 特任教授 学術顧問（現在に至る）

〔学会活動〕

年	内容
1977年～1980年	国際発生生物学会 運営委員
1993年～1996年	日本細胞生物学会 評議員
2001年～2013年	日本炎症・再生医学会 理事
2001年～2014年	日本再生医療学会 理事 監事 日本がん学会 評議員
2002年～2006年	日本宇宙生物学会 会長
2003年～2006年	公益社団法人日本動物学会 会長
2003年～2006年	日本発生生物学会 会長
2007年～2014年	生物科学学会連合 代表
2008年～現在	Int.J.Develop.Biol. 編集副主幹
2013年～2022年	国際生物学オリンピック 日本委員会委員長
2015年～現在	国際生物学賞審査委員会 委員
2020年～現在	日本国際賞審査委員会 委員長

〔研究内容〕

卵から親への形づくりの発生の仕組みで、形づくりのセンサー（オーガナイザー、形成体）の本体は65年余り不明であったが、世界で初めて中胚葉誘導物質としてアクチビンタンパク質であることを発見しました。アクチビンを用いてカエルやイモリ胚の未分化細胞から、筋肉や脊索、心臓、腎臓、膵臓、眼球等20余りの器官（臓器）や組織を試験管内で作製、その後、マウスのES細胞（胚性幹細胞）からも膵臓や腎臓、絨毛なども作製しました。これら試験管内つくられた心臓や膵臓などの臓器は生体に移植しても機能することを明らかにしました。また、未分化細胞とアクチビンの濃度でもって、体の頭部や胴尾部をつくることに成功しました。これらの臓器や組織形成で発現する新規の遺伝子も数多く発見しています。動物の形づくりや器官形成の仕組みを分子（遺伝子を含む）の言葉で理解する研究を進め、再生科学の基盤に大きく貢献しています。

〔受賞歴〕

年	月	受賞名
1990年	10月	日本動物学会賞、井上学位賞
1994年	5月	シーボルト賞、木原記念学位賞
1999年	3月	東レ科学技術賞
2001年	3月	上原賞、内藤記念学位賞
2001年	5月	紫綬褒章
2001年	6月	恩賜賞、日本学士院賞
2008年	11月	文化功労者、エルウィン・シュタイン賞 （ドイツ財団）
2017年	7月	リトアニア大統領勲章（学術功績賞）
2017年	11月	瑞宝重光賞

〔主な著作〕

著作名	年
発生とその仕組み	1983年
新しい発生生物学 生命の神秘が集約された「発生」の驚異（ブルーバックス）	2003年
生命システムをどう理解するか	2007年
生物の「安定と不安定」（NHK）	2016年
英文原著論文 約400編	



複雑系認知研究部門

[職位・名前]

副機構長、教授

岡ノ谷 一夫 OKANOYA Kazuo

[専門分野]

生物心理学分野、神経行動学分野

[最終学歴]

メリーランド大学大学院心理学研究科

生物心理学専攻博士課程修了 生物心理学博士

[職歴]

年	月	内容
1989年	4月	日本学術振興会 特別研究員 (上智大学生命科学研究所 博士研究員)
1990年	10月	科学技術庁 科学技術特別研究員 (農林水産省 客員研究員)
1993年	4月	井上科学財団 特別研究員 (慶應義塾大学文学部 訪問研究員)
1994年	3月	千葉大学文学部 助教授 千葉大学自然科学研究科 助教授
2004年	4月	理化学研究所脳科学総合研究センター チームリーダー
2010年	7月	東京大学大学院総合文化研究科 生命環境科学系 教授
2022年	4月	帝京大学先端総合研究機構 副機構長 教授 (現在に至る)

で構成される模倣と共感によって可能になり、これらは共にドパミンによって制御されています。これらの行動がどう進化しヒトの言葉と心を生み出したのか、その理解に少しでも近づきたいと思います。

[受賞歴]

年	受賞名
2001年	アメリカ心理学会比較心理 最優秀論文賞
2009年	日本科学ジャーナリスト会議 科学ジャーナリスト賞
2009年	中山書店 中山人間科学大賞
2011年	日本動物行動学会 日高敏隆賞
2012年	ニューロクリエイティブ研究会 脳科学褒賞
2013年	欧州言語夏期講習 最優秀講師賞

[学会活動]

年	内容
1983年～現在	日本動物心理学会
1983年～現在	日本動物行動学会
1989年～2004年	日本音響学会
1989年～2010年	日本神経科学学会
1993年～2004年	日本比較生理生化学会
1993年～2010年	日本認知科学会
2004年～現在	日本心理学会

[研究内容]

自分が自分であるのはなぜなのか。自分の心が宇宙の中で一瞬だけ存在し、その後永遠に消えてしまうのはなぜか。その意味を生物学と心理学から理解したいのです。動物たちはコミュニケーションによってお互いの行動を探り合っています。コミュニケーションの進化と仕組みを知ることで、自分がなぜ自分であるのか、理解することができるかも知れません。このため、小鳥のさえずり学習、ネズミの発声コミュニケーション、ヒトの音楽を対象として、その進化と神経機構を探っています。小鳥は父親からさえずりを学びます。ラットは嬉しいときと悲しいときで異なる鳴き方をします。ヒトは音の組み合わせである音楽から強い情動を感じ取ります。こうした行動は、脳神経系

[主な著作]

著作名	年
小鳥の歌からヒトの言葉へ	2003年
ハダカデバネズミ (吉田重人との共著)	2008年
言葉はなぜ生まれたのか	2010年
さえずり言語起源論	2010年
一小鳥の歌からヒトの言葉へ・改訂版	
言葉の誕生を科学する (小川洋子との共著)	2011年
進化言語学の構築 (藤田耕司との共編)	2012年
つながりの進化生物学	2013年
脳に心が読めるか	2017年
ことばと心 (編著)	2019年
進化言語学を共創する (藤田耕司との共編)	2022年



複雑系認知研究部門

[職位・名前]

特任教授 **狩野 方伸** KANO Masanobu

[専門分野]

神経科学、神経生理学

[最終学歴]

東京大学大学院医学系研究科
第3種博士課程第一基礎医学専攻 修了

[職歴]

年	月	内容
1986年	4月	自治医科大学医学部医学科 助手
1990年	4月	自治医科大学医学部医学科 講師
1995年	10月	理化学研究所国際フロンティア研究システム チームリーダー
1997年	10月	理化学研究所脳科学総合研究センター チームリーダー
1998年	4月	金沢大学医学部医学科 教授
2001年	4月	金沢大学大学院医学系研究科 教授
2005年	10月	大阪大学大学院医学系研究科 教授
2007年	9月	東京大学大学院医学系研究科 教授 (2023年3月まで)
2017年	10月	東京大学高等研究所 WPI ニューロインテリ ジェンス国際研究機構 (IRCN) 主任研究員 (2023年3月まで)
2019年	4月	東京大学大学院医学系研究科疾患生命工学セ ンター長 (2023年3月まで)
2023年	4月	帝京大学先端総合研究機構 特任教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
1986年～現在	日本神経科学学会 会員
2014年～2019年12月	日本神経科学学会 理事
1987年～現在	日本生理学会 会員
1990年～現在	日本生理学会 評議員
2003年4月～2012年3月	新潟大学脳研究所 客員教授
2008年4月～2012年3月	生理学研究所 運営委員
2015年4月～2022年3月	生理学研究所 客員教授
2009年4月～現在	新潟大学脳研究所 運営委員

[研究内容]

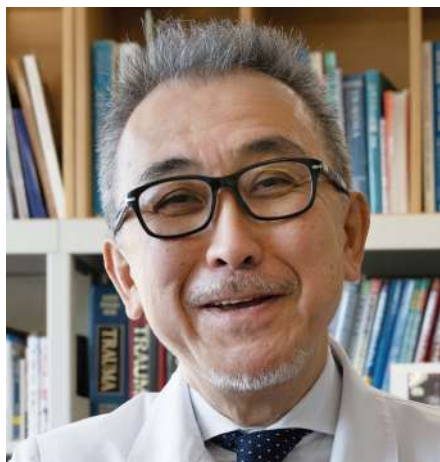
生まれたばかりの動物の脳には過剰なシナプスが存在していますが、生後の発達につれて必要なシナプス結合が強められて残り、不要なシナプス結合は除去されて、大人の脳にみられる機能的で無駄のない神経回路が出来上がります。この過程を”シナプス刈り込み”と呼びますが、狩野研究室では、マウス小脳の登上線維とプルキンエ細胞の間のシナプスの生後発達をモデル実験系として用いて、その仕組みを研究しています。これまで、神経活動がプルキンエ細胞でカルシウムチャネルやグルタミン酸受容体を駆動することがシナプス刈り込みに必須であることを明らかにし、これらの下流で働く分子群を探索してきました。引き続き、シナプス刈り込みの分子細胞機構を研究してその全貌の解明を目指すとともに、発達期のシナプス刈り込みの異常がどのような脳高次機能障害につながりうるのかを、様々な精神神経疾患モデルマウスを対象に研究していきたいと思っています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
1986年	2月	井上研究奨励賞
1992年	9月	お茶の水会医科同窓会 研究奨励賞
2002年	7月	塚原伸晃記念賞
2007年	2月	井上学術賞
2011年	9月	時実利彦記念賞
2015年	3月	上原賞
2015年	11月	紫綬褒章
2018年	11月	日本医師会 医学賞
2023年	3月	日本学士院賞

[主な著作]

著作名	年
Endocannabinoid-mediated control of synaptic transmission. Physiol. Rev. 89: 309-380	2009年
Multiple phases of climbing fiber synapse elimination in the developing cerebellum. Cerebellum 17: 722-734	2018年



危機管理研究部門

〔職位・名前〕

教授(兼任) **森村 尚登 MORIMURA Naoto**

〔専門分野〕

救急医学分野、災害医学分野

〔最終学歴〕

横浜市立大学医学部

〔職歴〕

年	月	内容
1988年	6月	日本医科大学付属病院 救命救急センター 助手
1989年	9月	横浜市立大学医学部附属浦舟病院 救命救急センター 特別職常勤医
1991年	6月	横浜市立大学医学部附属浦舟病院 集中治療部 助手
1995年	4月	横浜市立大学医学部附属浦舟病院 救命救急センター 助手 学内講師 (2000年4月まで)
2002年	4月	国立横浜病院 (現 独立行政法人国立病院 機構横浜医療センター) 救命救急センター 副センター長
2003年	3月	帝京大学医学部附属病院 救命救急センター 講師
2007年	4月	帝京大学医学部救急医学講座 准教授
2010年	10月	横浜市立大学大学院医学研究科 救急医学 主任教授
2016年	10月	東京大学大学院医学系研究科 救急医学 教授
2021年	4月	帝京大学医学部救急医学講座 主任教授 (現在に至る)
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授 (兼任) (現在に至る)

〔学会活動〕

年	内容
1994年	日本救急医学会 認定医
1998年	日本集中治療医学会 専門医
2003年	日本救急医学会 指導医
2003年	日本救急医学会 専門医
2004年	診療の質評価指標に関する委員会 委員長 (2017年1月1日～)
2010年	日本外傷学会 専門医
2017年	東京オリンピック・パラリンピックコン ソーシアム活動対応特別委員会 委員長
2019年	救急診療業務効率化検討委員会 委員長
2020年	新型コロナウイルス感染症特別委員会
2021年6月10日	日本臨床救急医学会副代表理事
2023年2月21日	日本賠償科学会・日本救急医学会 救護者保護に関する合同検討委員会 委員長

〔研究内容〕

突発不測の事態に当意即妙、臨機応変な対応が求められる救急医療に魅せられて救急科医に。その業務は危機管理そのものです。救急医療は全診療科、地域全体で対応する「面」の体制が必要であり、救急医療体制に係る課題についての研究に取り組んできました。他者支援の不作為に着目して課題を抽出し、これまで多部門・多機関間が共有する『緊急度』の概整理と普及、地域救急医療体制の質評価指標、災害時やマスギャザリングイベント時の危機管理体制地域ごとのリスクリソース均衡度調査などを研究テーマとしてきました。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会救急・災害医療対策学術コンソーシアム合同委員会 (<http://2020ac.com/>) の委員長を務めました。

〔受賞歴〕

年	月	受賞名
1989年	6月	外務省 外務大臣より感謝状 (バングラデシュへの災害医療支援)
2008年	3月	東京消防庁 消防総監より感謝状 (救急行政の推進への寄与)
2008年	9月	東京消防庁 救急部長より感謝状 (救急行政の推進への寄与)
2010年	11月	米国 ホワイトハウスメディカルユニットより感謝状 (2010年アジア太平洋経済協力 (APEC) 会議開催中の救急・災害医療体制整備に寄与)
2011年	11月	総務省消防庁 消防庁長官より感謝状 (東日本大震災に際し消防職員の健康管理等に從事した功績)
2012年	3月	東京消防庁 救急部長より感謝状 (消防行政の円滑な推進に協力し、都民生活の安全と東京消防の発展に寄与)
2017年	3月	東京消防庁 救急部長より感謝状 (消防行政の円滑な推進に協力し、都民生活の安全と東京消防の発展に寄与)
2019年	2月	東京都知事より感謝状 (大学研究者による事業提案制度において、都政の課題解決や東京の未来創出に資する提案)
2023年	5月	東京都知事より感謝状 (新型コロナウイルス感染症対策に対する貢献)

〔主な著作〕

著作名	年
プロジェクト 作為・不作為へ ハンセン病・薬害問題 本の泉社	2007年
いのちを救う災害時医療	2019年



オープンイノベーション部門

〔職位・名前〕

寄付講座・特任教授 **跡見 順子 ATOMI Yoriko**

〔専門分野〕

細胞生物学、身体運動科学、身心一体科学
健康科学、ストレスタンパク質

〔最終学歴〕

東京大学大学院教育学研究科
教育学専攻博士課程（教育学博士）

〔職歴〕

年	月	内容
1970年	4月	津田塾大学非常勤講師
1979年	4月	東京大学教育学部助手
1982年	4月	東京大学教養学部 講師
1985年	4月	東京大学教養学部 助教授（1994年3月まで）
1987年	7月	米国カリフォルニア大学 パークレー校 動物学科客員研究員 （1987年10月まで）
1991年	5月	国立精神神経センター神経研究所 文部省国内研究員（1992年2月まで）
1994年	4月	東京大学大学院総合文化研究科教授 （2007年3月まで）
1997年	8月	米国ノースウェスタン大学 分子生物学部 文部省 在外研究員（1998年1月まで）
2007年	4月	サステナビリティ学連携研究機構 特任研究員（2009年3月まで）
2007年	6月	東京大学名誉教授
2009年	4月	東京大学アイソトープ総合センター 特任研究員（2013年3月まで）
2010年	6月	嘉悦大学 非常勤講師（2016年6月まで）
2010年	10月	放送大学東京文京学習センター客員教授・ 非常勤講師（2015年6月まで）
2012年	10月	帝京科学大学 医療科学部 理学療法学科 非常勤講師（2016年3月まで）
2013年	4月	東京農工大学工学府客員教授（2023年3月まで）
2017年	10月	放送大学東京文京学習センター 非常勤講師（2020年3月まで）
2023年	4月	帝京大学 先端総合研究機構 寄付講座 特任教授

〔学会活動〕

年	内容
1979年～現在	日本体力医学会 評議員
2001年～2007年	全国大学体育連合 関東支部長
2002年～2012年	日本宇宙生物学会 副会長
2010年～2011年	男女共同参画学協会連絡会 運営委員長
2013年～2019年	日本体育学会監事
2015年～現在	日本未病学会顧問
2017年～2020年	日本スポーツとジェンダー学会 理事
2017年～現在	日本臨床ストレス応答学会評議員・幹事
2021年～2023年	日本女性科学者の会 会長

〔研究内容〕

人間である自分を知り生かす科学と教育及び健康とは何かを追求してきた。1Gの地球に創発した生命の生存原理は活動依存性である。即ち生きているとは環境からの刺激（ストレス）に应答している状態である。「運動適応」の生命機構解明の鍵分子として宇宙での微小重力を模したラット後肢懸垂モデルを使い α B-クリスタリン（ α B）を30年前に世界で初めて同定、タンパク質のコンフォメーション病を予防する分子シャペロン（ストレスタンパク質）であることを報告した。人間につなぐ基礎研究の新たな方向性として、 α Bと基質チューブリン・微小管細胞骨格タンパク質のダイナミクス維持機構及びメカニカル応答する細胞と二足歩行する人を対置し、階層を越えた共通原理と相違点の解明を行う身心一体科学を提唱している。種を越えた生命のストレス応答基盤材料としての産学連携・卵殻膜研究が15年前に加わり、細胞・身体をつなぐ細胞外マトリックスが上記システムを補完することを明らかにしつつあり、少子高齢社会におけるヘルスリテラシー向上・人材育成に貢献する。

〔受賞歴〕

年	月	受賞名
2008年	3月	（社）全国大学体育連合 功労賞
2010年	9月	（一社）日本宇宙生物科学会 功績賞
2015年	4月	平成27年度 科学技術分野の文部科学大臣 表彰 科学技術賞 理解増進部門

〔主な著作〕

著作名	年
誤解されている「・・・健康法」正しい管理と合理的鍛錬（共著）	1979年
『骨格筋と運動』（身体運動・栄養・健康の生命科学Q&A）（編著）	2001年
「細胞力」を高める～「身心一体科学」から健康寿命を伸ばす（単著）	2018年
ほどよいストレスが人を若くする（単著）	2022年
Practical Life Science to Understand and Utilize Your Own Body in which Cells Dynamically Respond to Dynamics（分担・単著）	2022年
Overcome Coronavirus with BODY-MIND INTEGRATIVE SCIENCE and Body-Mind Tuning in the Spine Based on Hsp/CRYAB Adaptation Theory（分担・共著）	2022年
身心一体科学 考え方と方法（単著）	2024年



オープンイノベーション部門

[職位・名前]

教授 **植田 利久** UEDA Toshihisa

[専門分野]

オープンイノベーション分野、エネルギー環境分野、
反応系の熱流体力学

[最終学歴]

慶應義塾大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程所定単位
取得退学 工学博士

[職歴]

年	月	内容
1982年	4月	慶應義塾大学工学部機械工学科 助手 (1986年3月まで)
1986年	4月	慶應義塾大学理工学部機械工学科 専任講師 (1991年3月まで)
1988年	9月	プリンストン大学 招聘研究員 (1989年8月まで)
1991年	4月	慶應義塾大学理工学部機械工学科 助教授 (1998年3月まで)
1998年	4月	慶應義塾大学理工学部機械工学科 教授 (2019年3月まで)
2015年	8月	帝京大学ジョイントプログラムセンター 客員教授 (2019年3月まで)
2019年	4月	帝京大学ジョイントプログラムセンター 教授 (2021年3月まで)
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
2008年5月～2020年5月	日本燃焼学会論文審査委員会 委員長
2008年5月～2020年5月	日本燃焼学会 理事
2010年6月～2012年5月	日本機械学会 編集理事
2011年12月～2013年3月	第49回燃焼シンポジウム実行 委員会 委員長
2014年5月～2015年4月	日本機械学会関東支部 支部長
2015年5月～2016年4月	日本機械学会 副会長
2018年5月～現在	日本機械学会機械遺産監修 委員会 委員

[研究内容]

燃焼現象、高粘度液体の混合、反応など、反応系の熱流体力学
に関する研究を行っています。とくに非定常、非線形、非平衡
な現象を対象に研究を進めています。
非定常現象：メタンハイドレート表面の火炎の燃え広がり
メタンハイドレート表面を火炎が燃え広がるときの様子を、
ハイドレート表面温度と解離温度の関係に着目して検討して
います。
非線形現象：反応性液体の混合、反応促進
粘度の高い液体を混ぜるときにはカオス混合が有効です。応
答性を有する液体がカオス混合するとき、反応がどのように
進行するかについて検討しています。
非平衡：燃料濃度が時間変動するときの火炎挙動
燃料濃度が時間的に変動するとき起こる、定常火炎では見ら
れない分子輸送について検討しています。
詳細は、帝京大学研究者総覧をご覧ください。
[https://www3.med.teikyo-u.ac.jp/profile/
ja.32a8971b8718c876.html](https://www3.med.teikyo-u.ac.jp/profile/ja.32a8971b8718c876.html)

[受賞歴]

年	月	受賞名
1976年	3月	日本機械学会 畠山賞
1988年	4月	日本機械学会 奨励賞
1990年	12月	第1回炎の写真展日本燃焼研究会 会長賞
2003年	3月	エネルギー管理功績者関東経済産業 局長賞
2006年	10月	日本機械学会熱工学部門 業績賞
2017年	3月	日本機械学会関東支部 功績賞
2017年	11月	日本機械学会創立120周年記念表彰 会員功労者表彰

[主な著作]

著作名	年
反応系の流体力学	2002年



オープンイノベーション部門

[職位・名前]

特任教授(兼務) **光石 衛 MITSUISHI Mamoru**

[専門分野]

ロボティクス、生産工学

[最終学歴]

東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻博士課程修了
工学博士

[職歴]

年	月	内容
1986年	4月	東京大学工学部産業機械工学科 講師 (1989年3月まで)
1987年	10月	ドイツフラウンホーファー生産技術と自動化 に関する研究所 客員研究員 (1988年10月まで)
1989年	4月	東京大学工学部産業機械工学科 助教授 (1995年3月まで)
1995年	4月	東京大学大学院工学系研究科産業機械工学 専攻 助教授 (1999年8月まで)
1999年	8月	東京大学大学院工学系研究科産業機械工学 専攻 教授 (2009年3月まで)
2009年	4月	東京大学大学院工学系研究科機械工学 専攻 教授 (2022年3月まで)
2013年	4月	東京大学 教育研究評議員 (2017年3月まで)
2014年	4月	東京大学大学院工学系研究科長 工学部長 (2017年3月まで)
2017年	4月	東京大学 大学執行役・副学長 (2021年3月まで)
2022年	4月	独立行政法人大学改革支援・ 学位授与機構 理事 (現在に至る)
2022年	4月	早稲田大学次世代ロボット研究機構 研究院客員教授 (現在に至る)
2022年	6月	東京大学 名誉教授
2022年	4月	帝京大学先端総合研究機構 特任教授(兼務) (現在に至る)
2023年	3月	DMG森精機株式会社 社外取締役 (現在に至る)

[学会活動]

年月	内容
2019年8月～2021年8月	生産工学に関する国際アカデ ミー (CIRP) 会長
2019年11月～2021年11月	日本コンピュータ外科学会 理事長

[研究内容]

ロボット手術が役立つ場面は、狭小空間での手術、微細手術、
正確な手術、遠隔手術です。スーパーマイクロサージェリ、手

術におけるプロセスイノベーション、遠隔手術、診断と治療の
一体化と自動化などをテーマに、具体的には深部脳神経外科手
術支援システム、眼科手術支援システム、小児外科手術支援シ
ステム、人工関節置換術支援システム、内臓系手術支援システ
ムなどを構築しています。これらのシステムを実現するにあたっ
て、生産工学の知識とデジタル技術を活用しています。例えば、
人工関節置換術における骨切除の際に骨にダメージを与えず、
また、骨が壊死しないような温度で切除するための切除方法の
検討を行っています。また、AIを導入し、精度や操作性を向上
するとともに、医師の判断の支援機能も導入する一方で、医師
の最終判断機能を維持するなど、AI組み込みの適切なあり方に
ついての検討も行っています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
2005年	3月	日本機械学会 フェロー
2007年	3月	砥粒加工学会 論文賞
2007年	5月	日本機械学会 ロボティクス・メカトロ ニクス部門 学術業績賞
2008年	8月	生産工学に関する国際アカデミー (CIRP) フェロー
2010年	11月	日本コンピュータ外科学会 論文賞
2013年	9月	日本ロボット学会 フェロー
2014年	2月	日本機械学会 生産加工・工作機械部門 部門功績賞
2016年	10月	同上 研究業績賞
2019年	10月	天津大学 名誉教授
2019年	11月	日本コンピュータ外科学会 論文賞
2020年	10月	日本学術会議 会員
2022年	4月	日本機械学会 名誉員
2022年	8月	生産工学に関する国際アカデミー (CIRP) 栄誉会員
2023年	3月	精密工学会 沼田記念論文賞

[主な著作]

著作名	年
Mitsuishi M, et al, Biomanufacturing. <i>CIRP Annals</i> 62(2):585-606.	2013年
Iulian I. Iordachita, Marc D. De Smet, Gerrit Naus, Mamoru Mitsuishi, Cameron N. Riviere, Robotic Assistance for Intraocular Microsurgery: Challenges and Perspectives, <i>Proc. of the IEEE</i> 110(7):893-908.	2022年



オープンイノベーション部門

[職位・名前]

特任准教授 **山下 紘正 YAMASHITA Hiromasa**

[専門分野]

医療工学 高解像度内視鏡・顕微鏡システム
手術マニピュレータ

[最終学歴]

東京大学大学院情報理工学系研究科
知能機械情報学専攻 博士課程修了 博士（情報理工学）

[職歴]

年	月	内容
2004年	4月	東京大学大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 日本学術振興会 特別研究員 DC1 (2007年3月まで)
2007年	4月	国立成育医療センター特殊診療部 臨床研究員 (2008年3月まで)
2008年	4月	東京大学大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 助教 (2010年9月まで)
2010年	10月	国立成育医療研究センター臨床研究センター 研究員 (2015年3月まで)
2012年	4月	法政大学理工学部 兼任講師 (2019年3月まで)
2013年	4月	法政大学デザイン工学部 兼任講師 (2019年3月まで)
2015年	4月	日本大学総合科学研究所 准教授 (2017年3月まで)
2017年	4月	カイロス株式会社 研究開発本部長 (2020年5月まで)
2020年	6月	エア・ウォーター・バイオデザイン 株式会社 取締役医療事業部長 (2021年8月まで)
2021年	9月	エア・ウォーター株式会社グループテクノロ ジーセンター プロジェクトリーダー
2022年	1月	帝京大学先端総合研究機構 特任准教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
2011年11月～現在	小切開・鏡視外科学会 評議員
2013年10月～現在	日本看護理工学会 評議員
2017年4月～2018年3月	日本コンピュータ外科学会 評議員

[研究内容]

東京大学大学院情報理工学系研究科では、内視鏡外科手術用マニピュレータの実用化を目指して、独自の機構を考案・設計・試作・評価に取り組みました。博士課程修了後は国立成育医療研究センター、東京大学にて、科研費や経済産業省、厚生労働省、NEDO等のプロジェクトに参画し、様々な研究機関・企業との共同研究にて、子宮内胎児診断・治療を目的とした手術用デバイスや内視鏡、超音波ナビゲーションなどの開発に従事しました。2013年より8K映像技術の内視鏡応用を開始し、AMED研究開発事業に取り組みながら、2017年には8K内視鏡システム製品化を果たしました。現在は8K医療機器の開発経験を活かし、他分野へも応用可能な遠隔ストリーミング対応の8Kシステムの研究開発を推進中です。ノイズのない高速通信デバイスとして期待されているプラスチック光ファイバーと映像技術を組み合わせた応用研究も開始しています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
2005年	11月	日本コンピュータ外科学会 2005年度 論文賞（工学賞）
2006年	10月	日本コンピュータ外科学会 05年度 CAS Young Investigator Award 日立メディコ賞 Gold賞
2008年	9月	第24回ライフサポート学会大会 バリアフリーシステム開発財団奨励賞
2010年	9月	ライフサポート学会論文賞
2013年	10月	第1回日本看護理工学会学術集会 優秀講演賞

[主な著作]

著作名	年
Computer-Aided Automatic Delivery System of High-Intensity Focused Ultrasound for Creation of an Atrial Septal Defect	2012年
Super Eyes and Hands for Future Fetal Intervention	2012年



オープンイノベーション部門

[職位・名前]

特任教授 **横堀 壽光 YOKOBORI Toshimitsu**

[専門分野]

材料強度学、メゾスケール力学、臨床力学

[最終学歴]

東北大学大学院 工学研究科
機械工学第2専攻博士課程修了 工学博士

[職歴]

年	月	内容
1978年	4月	東北大学工学部 助手
1979年	6月	東北大学工学部 助教授
2001年	1月	東北大学大学院工学研究科 教授 (2016年3月まで)
2016年		東北大学 名誉教授
2017年	4月	帝京大学 特任教授 戦略的イノベーション研究センター 副センター長 (2021年3月まで)
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 特任教授 (現在に至る)

[学会活動]

年	内容
1984年～2000年	日本バイオマテリアル学会 理事
1987年～1993年	Section chairman of ASTM F4. 04. 10 (Mechanical Test method on Cardio Vascular Implants and Materials)
1997年～2003年	日本学術会議物質創製工学研究 連絡委員会 委員
2000年、2004年	日本材料学会 理事
2001年～2023年	国際材料破壊学会 (ICF) 事務局 局長 (Secretary General)
2004年～2013年	Co-chairman of TWA25, TWA31 (Versailles Project on Advanced Materials and Standards)
2004年～現在	日本機械学会フェローを経て永年会員
2010年～現在	Editor in Chief of Bio-medical Materials and Engineering
2011年～現在	日本学術振興会先端材料強度 129委員会 委員長
2018年～現在	日本機械学会 名誉員
2018年～現在	日本臨床バイオメカニクス学会 功労会員

[研究内容]

金属物理学と巨視力学を繋ぐメゾスケール力学を構築し、疲労および水素脆化、高温クリープなどの時間依存型破壊を定量的に予測する独自の理論を提案しています。金属疲労き裂成長および水素脆化では、その本質である転位群や水素の非定常な移動を数値解析する手法を開発し、これらの破壊を予測する力学的指標を導きました。また、高温クリープき裂成長に関しては、実験と解析により、構造体での寿命予測を可能とする Q^* パラメータという指標を導いています。本指標は、ASTMの規格やISO/TTA5:2007に引用紹介され、 Q^* パラメータの正当性が海外

で検証されています。さらに、粘弾性理論と複雑性の科学も組み合わせ、 I^* なる血管壁粘弾性発現度指標を提案し、動脈硬化や動脈瘤を非侵襲で診断する独自の理論を構築し、診断装置の開発を行っています。これらの指標は構造体の安全性維持に寄与するものであり、さらなる実用化を目指しています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
1983年	4月	日本機械学会 奨励賞
2003年	6月	日本材料強度学会 論文賞
2005年	4月	日本材料学会 学術貢献賞
2005年	10月	ASTM F04 Ten Years Service Award
2010年	10月	日本機械学会 材料力学部門賞業績賞
2012年	5月	日本材料学会 支部功労賞
2013年	6月	ICF Honorary Fellow (Int. Congress on Fracture, (国際材料破壊学会))
2014年	7月	日本機械学会 材料力学部門賞功績賞
2017年	6月	日本学士院賞
2017年	6月	ICF Takeo Yokobori Gold Medal, (ICF)
2021年	4月	HIDA Award, "Life Time Achievement"

[主な著作]

著作名	年
The chapter of Q^* parameter for Crack Growth Prediction in Comprehensive Structural Integrity, 2nd edition	2022年 Elsevier Ltd
The chapter of The quantitative estimation of mechanical performance on the creep strength and prediction of creep fracture life for creep ductile materials based on QL^* parameter, in Creep deformation	2022年, edited by G.Revindran and V. Makesk Intech Open, 2022年
Theory of particle transport phenomena during fatigue and time dependent fracture materials based on mesoscale dynamics and their practical applications	Proc. of the Japan Academy Ser.B, 96,(2020), pp.373-393. 2022年
The chapter of Holistic approach on the research of yielding, creep and fatigue crack growth rate of metals based on simplified model of dislocation group dynamics in Dislocation mechanics of metal plasticity and fracturing, 他、論文、412編、著作、24編 (分担執筆を含む)、血管疾患診断装置 (TRY1) 医療製造承認装置、2004～2009、(発明))	2020年, edited by R.W. Armstrong, MDPI, 2020年



社会連携部門

[職位・名前]

教授 田沼 唯士 TANUMA Tadashi

[専門分野]

機械工学分野 数値流体力学の製品設計及び医学応用研究
設計法の研究

[最終学歴]

東北大学大学院工学研究科 機械工学専攻博士前期課程修了
東北大学 博士（工学）1995年

[職歴]

年	月	内容
1980年	4月	東京芝浦電気株式会社（現 株式会社東芝） タービン工場開発部
1995年	4月	株式会社東芝重電技術研究所 新エネルギー機械開発部 課長
1998年	4月	株式会社東芝京浜事業所原動機部 タービン設計担当 参事
2001年		同 原動機部 主幹
2010年		横浜国立大学 客員教授（兼務）
2010年		帝京大学ジョイントプログラムセン ター 教授 帝京大学大学院理工学研究科兼理工学部 機械・精密システム工学科 教授（兼任）（現在に至る）
2013年	5月	文部科学省研究振興局 技術参与 （兼務 2015年 4月まで）
2017年	4月	帝京大学戦略的イノベーション研究センター 教授
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 教授 （現在に至る）

[学会活動]

年	内容
2012年 4月～2014年 3月	ターボ機械協会 副会長
2015年 4月～2016年 3月	日本ガスタービン学会 会長
2021年 4月～現在	IEC/TC5 (steam turbine) 日本委員会 副委員長
2021年 4月～現在	ターボ機械協会 蒸気機械委員会 委員長

[研究内容]

専門は機械工学、特に流体力学と関連力学分野を基盤とする設計に関する分野です。
数値流体力学（CFD）を用いた、発電用大型蒸気タービンなどのターボ機械の性能向上のための研究、太陽光・風力などの再生可能エネルギー発電大量導入に必要な系統安定化電源用蒸気タービンの低負荷安定運転のための研究、流体力学の医学・歯学分野への応用研究、持続可能な産業振興のための設計教育の研究を行っています。

[受賞歴]

年	月	受賞名
1993年	7月	日本機械学会流体工学部門賞 功績賞
2012年	4月	日本機械学会 フェロー
2022年	11月	日本ガスタービン学会 功労賞

[主な著作]

著作名	年
Unsteady Aerodynamics and Aeroelasticity of Turbomachines, Edited by Y.Tanida and M. Namba（部分執筆）, Elsevier Science B.V., 1995 " Navier-Stokes Analysis of Unsteady Transonic Flows through Turbine Cascades" を執筆	1995年
カラー表現による可視化技術（谷田好通 監修 ISBN4-938555-54-9、共同執筆）、フジテクノシステム、1996 「流れの光学的可視化法」のセクションを執筆	1996年
ターボ機械協会編；蒸気タービン 新改訂版 第2刷, 2017（共著、編集）	2017年
Tanuma, T. (ed.), Advances in Steam Turbines for Modern Power Plants, Woodhead publishing series in energy, Elsevier Ltd., 2nd edition, 2022.（共著、編集）	2022年



社会連携部門

〔職位・名前〕

副機構長、産学連携推進センター長、特任教授

中西 穂高 NAKANISHI Hodaka

〔専門分野〕

テレワーク、地域活性化、産学連携

〔最終学歴〕

東京工業大学大学院

イノベーションマネジメント研究科イノベーション専攻

〔職歴〕

年	月	内容
1982年	4月	通商産業省（現 経済産業省） （2012年7月まで）
2005年	6月	高知県 副知事
2008年	1月	経済産業研究所 上席研究員
2008年	7月	内閣参事官
2009年	7月	東京工業大学大学マネジメントセンター 教授・産学連携推進本部 本部長代理
2012年	9月	帝京大学ジョイントプログラムセンター 教授
2014年	4月	帝京大学知的財産センター 副センター長
2017年	4月	帝京大学戦略的イノベーション研究センター 教授（兼任）
2017年	7月	帝京大学知的財産センター センター長
2020年	8月	帝京大学産学連携推進センター センター長 （現在に至る）
2021年	4月	帝京大学先端総合研究機構 副機構長・教授
2022年	4月	帝京大学先端総合研究機構 副機構長・特任教授（現在に至る）

〔学会活動〕

年	内容
1998年～現在	日本ベンチャー学会 会員
2005年4月～現在	日本テレワーク学会 理事・副会長
2009年7月～現在	大学技術移転協議会 理事

〔研究内容〕

テレワークは、これまでも働き方改革やWLBの手段として進められてきましたが、昨今はCOVID-19対策としても強く求められています。また、インターネットを活用してクラウド上の人に仕事を委託するクラウドソーシングが、新しい仕事の進め方として注目されています。しかしこれらの働き方には課題もたくさんあります。今日の社会の変化に対応したテレワークやクラウドソーシングの研究をしています。

地域活性化の研究では、地域の経済指標が良くなるだけでなく、地域の人々が元気になるための研究をしています。

特許等の知的財産の活用や共同研究の推進、研究データの活用などを通じて大学の「知」を社会に役立てていくのが産学連携です。特に研究データの利活用は、オープンサイエンスの流れの中で、国の政策として進められています。産学連携や研究データの利活用を中心とする、大学における多様な形の社会連携の研究を進めています。

〔主な著作〕

著作名	年
どの自治体でも実践できる地域活性化モデル （彩流社）	2011年
テレワークが未来を創る（インプレス R&D）	2015年
Economic Impact of Telework in Japan	2016年
A Solution to the Long-Hours Working of Self-Employed Teleworking or Crowdsourcing	2017年
The Use of Crowdsourcing as a Business Strategy	2020年
Types of Crowdsourcing and their Characteristics	2022年

先端総合研究機構 所属教員一覧(2023/4/1～)

※50音順で表記 ※助手以上のみ掲載

① 職位 ② 専門分野 ③ 学位 ④ 最終学歴



大畑 広和 OHATA Hirokazu

- ① 講師
- ② 分子腫瘍学
- ③ 博士(科学)
- ④ 東京大学大学院新領域創成科学研究科 情報生命科学専攻 博士課程修了



小川 道夫 OGAWA Michio

- ① 助手
- ② 計算科学
- ③ 修士
- ④ 東海大学大学院工学研究科 航空宇宙学博士課程前期 修了



尾関 郷 OZEKI Go

- ① 講師
- ② 材料強度学(高温強度、水素脆化)
- ③ 博士(工学)
- ④ 東北大学大学院工学研究科 ナノメカニクス専攻 博士課程後期3年の課程 修了



柏原 宏香 KASHIHARA Hiroka

- ① 助教
- ② 細胞生物学
- ③ 博士(医学)
- ④ 大阪大学大学院医学系研究科 修了



木澤 利英子 KIZAWA Rieko

- ① 助教
- ② 教育心理学、英語教育
- ③ 修士(教育学)
- ④ 宇都宮大学大学院教育学研究科 博士課程



北又 学 KITAMATA Manabu

- ① 助教
- ② 細胞生物学
- ③ 博士(理学)
- ④ 東京大学大学院理学系研究科 生物化学専攻 単位取得退学



小林 夢子 KOBAYASHI Yumeko

- ① 助教
- ② 発生生物学、分子生物学
- ③ 博士(理学)
- ④ 東京大学大学院理学系研究科 生物科学専攻



近藤 晶子 KONDOW Akiko

- ① 助教
- ② 発生生物学
- ③ 博士(工学)
- ④ 東京大学大学院工学系研究科



佐郡 和人 SAKOORI Kazuto

- ① 助教
- ② 行動薬理学、動物行動学
- ③ 博士(農学、論文博士)
- ④ 宇都宮大学大学院農学研究科 生物生産学専攻(修士課程)



清水 美穂 SHIMIZU Miho

- ① 寄付講座 特任准教授
- ② 分子生物学、健康科学
- ③ 博士(薬学)
- ④ 北海道大学大学院薬学研究科 製薬化学専攻博士課程



白土 玄 SHIRATSUCHI Gen

- ① 助教
- ② 細胞生物学
- ③ 博士(理学)
- ④ 東京大学大学院理学系研究科 生物科学専攻 博士課程 満期退学



鈴木 浩也 SUZUKI Koya

- ① 助教
- ② 腫瘍免疫学
- ③ 博士(医学)
- ④ 大阪大学大学院医学系研究科



高田 剛志 TAKATA Takeshi

- ① 助教
- ② AI活用:VR、MRの応用:医学物理
- ③ 博士(診療放射線学)
- ④ 帝京大学大学院医療技術学研究科 診療放射線学専攻 博士課程



戸田 裕子 TODA Yuko

- ① 講師
- ② 産学連携学、公衆衛生学
- ③ 公衆衛生学修士(専門職)
- ④ 帝京大学大学院公衆衛生学研究科 公衆衛生学専攻専門職学位課程



柳原 真 YANAGIHARA Shin

- ① 講師
- ② 脳科学 神経科学 神経生理学
- ③ 博士(農学)
- ④ 名古屋大学大学院生命農学研究科 生物機構・機能科学専攻 博士課程修了



渡邊 貴樹 WATANABE Takaki

- ① 講師
- ② 神経生理学
- ③ 博士(理学)
- ④ 名古屋大学大学院理学研究科 生命理学専攻

産学連携推進センター／研究コンプライアンス室

産学連携推進センター

成り立ち

帝京大学の持つ「知」の社会還元を通じて、大学の責務の一つである社会貢献を果たすため、2004年に設立された知的財産センターを2014年に改組・拡充し、活動を行っています。なお、2020年度より、帝京大学産学連携推進センターと名称を変更しております。

活動内容

- 1 本学における知的財産の創出、管理、活用**
帝京大学の研究成果を特許等の知的財産に創りあげ、企業へのライセンスなどにより活用しています。
- 2 本学教職員の職務発明に関する諸手続き**
知財に関わる学内の手続き、特許事務所との打ち合わせなど、知財の権利化・活用のサポートを行います。
- 3 共同研究、受託研究等大学と産業界との連携に係る業務**
共同研究等の実施に際し、知的財産に関する条件交渉など、契約締結に至るサポートを行います。
- 4 大学と産業界・地域との連携に係る業務**
各種展示会への出展、産学連携イベントに参加するなどにより、本学の「知」を広く社会に伝えています。
- 5 大学発ベンチャー創出に対する支援**
教職員や学生の起業マインドの醸成、ベンチャー創出の取り組みの支援を行っています。
- 6 研究シーズ集「帝京の『知』」の発刊**
学内の研究シーズを取りまとめ、全学にまたがる研究シーズ集を作成、発刊しています。
- 7 産学連携に関わる調査**
本学の産学連携関連のデータを取りまとめるとともに、政府等の産学連携に関わる調査に対応しています。

今後の目標

産学連携推進センターでは、本学の持つ知的財産の管理・活用、企業等との共同研究・受託研究等の技術移転活動に加え、研究データの利活用、大学発ベンチャーの創出・育成、地域の企業との連携による地域活性化などを行っています。これらの活動を通じて、帝京大学が総合大学として持つ幅広い「知」を社会へつなげ、イノベーション創出や持続可能な社会の実現に向け積極的に取り組んでまいります。

研究コンプライアンス室

成り立ち

研究コンプライアンス室は、研究関連の法令等遵守に取り組む学長直下の全学組織として2019年に発足し、安全保障輸出管理の業務を開始しました。2020年度からは研究不正防止と産学連携に係る利益相反管理、2022年度からは実験動物施設の運営管理を管轄業務に加えました。

活動内容

研究コンプライアンス室が現在所管している業務は以下の分野の学内統括です（括弧内はこれまでの主な実績）

- 1 安全保障輸出管理**
（安全保障輸出管理体制の構築、学内教育研修の新規実施など）
- 2 研究不正防止**
（全学統一の研究データ保存体制構築、研究不正事案対応、学内教育研修の新規実施など）
- 3 産学連携に係る利益相反管理**
（利益相反自己申告基準の学内統一、利益相反申告システムの導入など）
- 4 実験動物施設の運営管理**
（帝京大学実験動物施設運営委員会の創設など）

今後の目標

信頼性の高い研究・事業環境を自発的に構築することは、グローバルな先端研究ネットワークに参加し、多様な人材によるイノベーションを創出し続けるための前提条件です。
本学が産学連携や大学内で学部横断的な共同研究への取り組みを加速していく中で、大学として統一的な方針を定めて教職員の教育・啓発を含めた法令等遵守の体制を強化していく必要があります。
こうした流れの中で、全学組織でもある研究コンプライアンス室の役割は今後一層重要になると認識しています。

活動報告

先端総研セミナー

月に1回程度、帝京大学内の教職員や学生等へ向けたセミナーを開催しています。文理融合型の様々な分野の専門家による研究セミナーや講演会を定期的を開催することにより、異なる専門性をもった者同士の知的交流や自由に議論できる場を設けております。

講演内容



AI活用部門
「人工知能の発展とこれからの社会」 甘利俊一特任教授



ヒューマニティーズ研究部門
「科学研究と哲学的思考」 羽入佐和子特任教授

学談会

月に1回、水曜日の午後に、より一層の知的交流の促進を目指して、「学談会」を開催しています。各研究者の研究を大切にしながらも研究を横展開し、学際的に研究を進めるために、分野の異なる研究者とも交流を通じて啓発を目的としています。異分野の研究者との触れ合いを通じて相互啓発やアイデアの創出、社会貢献や若い人の人材育成等を目指し、帝京大学の研究者たちがお茶やコーヒーを飲みつつ、リラックスしながら自由に議論をする場を設けております。



広報・出版物

「ACRO Times」をはじめ、年報や活動報告書等の刊行、ウェブサイト等の充実によりさまざまな情報発信を行っております。

ACRO Times 2021年4月に先端総研が設立されて以降、月に1回、先端総研に関する情報を帝京大学内の教職員や学生等へ発信する学内誌を刊行しております。

センター・研究所年報 帝京大学のセンター・研究所の概要を掲載しております。



帝京大学出版会

大学の掲げる「自分流」の哲学に基づいた「実学・国際性・開放性」を追求し、「知の発見・探求・創造・発信・共有」を目的として「帝京大学出版会」を設置するため、全学的な帝京大学出版委員会を設置しました。

先端総研としても出版事業を通じて帝京大学の多様な成果をわかりやすく社会に発信し、学術・教育・文化の振興・発展に寄与するために支援していきます。



社会に成果をわかりやすく発信する

研究交流シンポジウム

年に一度、多くの本学教職員、大学院生、学部生の方々に参加していただき、最新の研究活動等について情報発信するシンポジウムを主催しています。

パネルディスカッションの動画配信やポスター発表も閲覧することができ、キャンパスおよび学部・学科を越えた連携研究の足掛かりとして有意義であったという声や、シンポジウムでのポスター発表を踏まえた助成金に期待する声など、研究交流シンポジウムの重ねての開催を望む声を数多くいただいております。

開催内容 講演・パネルディスカッション、ポスター発表、ネットワーキングセッション、懇親会 等

● パネルディスカッションのテーマ等内容(役職等は当時のまま)

第1回(2018.12.25)

- テーマ** キャンパスや学部を超えた連携の必要性、2021年4月創設予定の先端総合研究機構への期待などについて
- パネリスト** 冲永 佳史(理事長・学長) 井上 圭三(理事・副学長) 寺本 民生(理事・臨床研究センター長)
筒井 清忠(文学部長) 波江野 勉(理工学部長)
- 司会進行** 浅島 誠(先端総合研究機構設立準備委員会委員長)

第2回(2019.8.27)

- テーマ** 科学とヒューマニティーズの融合
- パネリスト** 冲永 佳史(理事長・学長) 筒井 清忠(文学部長) 金子 希代子(薬学部教授)
甘利 俊一(理化学研究所荣誉研究員) 稲垣 恭子(京都大学教育学部長)
- 司会進行** 浅島 誠(先端総合研究機構設立準備委員会委員長)

第3回はコロナ禍のため、パネルディスカッションは中止

第4回(2021.9.17～2021.9.24)※オンライン開催

- テーマ** 今後の先端総合研究機構の在り方、科学の在り方について
- パネリスト** 冲永 佳史(機構長) 月田 早智子(教授(健康科学研究部門))
横堀 壽光(特任教授(オープンイノベーション部門))
- 司会進行** 浅島 誠(副機構長)

第5回(2022.8.29)

- テーマ** 先端総合研究機構の活動の意義を改めて考えるーコロナ禍による環境変化を受けてー
- パネリスト** 冲永 佳史(理事長・学長・機構長) 中西 穂高(副機構長・産学連携推進センター長)
羽入 佐和子(特任教授(ヒューマニティーズ研究部門)) 市川 伸一(特任教授(次世代教育研究部門))
山下 紘正(特任准教授(オープンイノベーション部門))
- 司会進行** 浅島 誠(副機構長)

パネルディスカッションの様様



ポスター発表の様子



助成金／SDGs

先端総合研究機構の助成金

先端総合研究機構では、帝京大学所属の研究者に対し助成金制度を設けています。

- インキュベーション助成金
- チーム研究助成金

目的

インキュベーション助成金

総合大学である本学の力を結集して、本学の有する貴重な研究シーズの価値を高め、その知見を様々な社会的課題の解決に役立たせることなどを旨として当該連携研究を通じて、本学の優位性発揮を促進する。

チーム研究助成金

多様化・総合化・大型化が急速に進み、様々な要請を社会から受けており、1つのテーマを分析研究する際においても学際的な研究の重要性が高まっており、多角的な分野からのアプローチが必要となってくることから、学部・キャンパスを超えた連携研究を促進する。

採択状況

インキュベーション助成金					
年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
新規	26件	21件	17件	18件	23件
継続	—	25件	33件	41件	52件

チーム研究助成金			
年度	2021年度	2022年度	2023年度
新規	19件	11件	10件
継続	—	19件	29件

研究チーム助成金の代表例



医療 × 地域ケア × 多職種チーム

医療・介護に関する信頼できる情報を共有し、地域における多職種チームケアを学ぶ場を提案。専門職種がチームになり、誰もが集える場づくり、支え合える仕組みを通して、住み慣れた地域で安心して暮らすことのできる街づくりを目指しています。

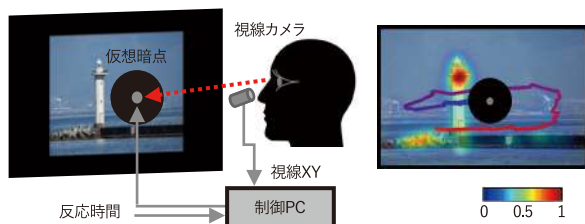
(参加学部: 医、薬、医技、法、経済)



薬物送達学 × 医工学

超音波のエネルギーを増幅するマイクロバブルを利用し、がんの早期発見に向けた超音波造影剤の開発と抗がん剤ががん組織に効率よく届けるためのドラッグデリバリーシステム (DDS) に関する研究を進めています。

(参加学部: 薬、医、理工)

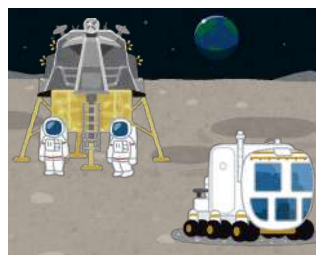


心理学 × 情報工学

知覚体験シミュレーター(視覚障害)

取得情報量と認知特性からモデル生成し多様性の理解と支援に取り組む

(参加学部: 文、情報通信研究機構)

微生物・宇宙・放射線 × 心理・人文・博物館
宇宙開発 × 地域経済

過酷な宇宙環境を統合的に理解し、悪化する地球環境下で持続可能な国際社会創りに貢献する。

宇宙科学研究チーム

(参加学部: 医、医技、福医技、文、博物館、理工、経済、G-MEC、EBM)

新産業共創セミナー

本学は、イノベーション創出や社会課題解決に貢献するため、本学が保有するシーズや知的リソースを最大限に活用し、企業の皆さまとの組織的・継続的な共同研究の推進や共創環境の構築をめざしています。

その第一歩として、本学と企業とのネットワーキングを強化し、共同研究テーマを模索する機会にすべく、全3回にわたるセミナーを企画し、2022年11月4日(金)に実施した第1回「逆境を乗り越える経営と人材戦略」に続き、11日(金)は第2回「アクティブシニアをつくる健康・予防医療」を、21日(月)は第3回「『計測・可視化』で拓く健康管理ビジネス」をテーマに、さまざまな100社近くの企業の皆さまにご参加いただきました。



オープニングセレモニー

2022年5月20日(金)、帝京大学先端総合研究機構オープニングセレモニーを執り行いました。2016年に50周年を迎えた本学が、さらなる成長と発展をもって社会に貢献をするために、本学における文理融合型で学際的な先端的研究の中核拠点として2021年4月に当機構を設立しました。本セレモニーは機構開設時を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大を受け、また国内のワクチン接種状況を鑑み、開設から一年後に対面とオンラインとのハイブリット型での開催となりました。産官学の分野の多くの方々のご参加のもとに盛大に行われました。



08

施設紹介



fMRI

実験動物の生体内のサンプルを非侵襲で観察することができる実験動物用MRI装置を導入しています。これにより固定サンプルのみならず、生体内の血流、脳の活性化部位などを経時的に新しく可視化できます



フリーザー室

フリーザーごとに温度変化を管理し、遠隔監視や停電時に作動する発電機等を設置しています。



クリーンベンチ

細菌の培養や遺伝子組み換え実験等に使用する実験器具の他、滅菌器や安全キャビネットを設置しています。





マウス飼育ラック

動物(マウス・ラット)用飼育ラックは、円形型のラックに三角型のケージを挿入することで床面積あたりの高収納の飼育匹数を確保し、動物への刺激を抑えた安寧なケージ内環境を整えています。



オープンラボ

仕切りのない大きなワンルームとなっており、壁はガラス張りで廊下から研究の様子が見える開放的なイメージとなっています。



コラボ室

部屋の中央にフリーデスクを配置し、研究者等が自由に利用できるワークスペースを設けています。

ディスカッションラウンジ

打ち合わせやプレゼンテーション等、様々な用途で活用し研究者同士が自由に交流できる場所として各階に設けています。



休憩ラウンジ

各階で家具・床・壁紙が変化し、ラボとは違う雰囲気を出すリラクゼーション空間を設けております。

キャンパス案内

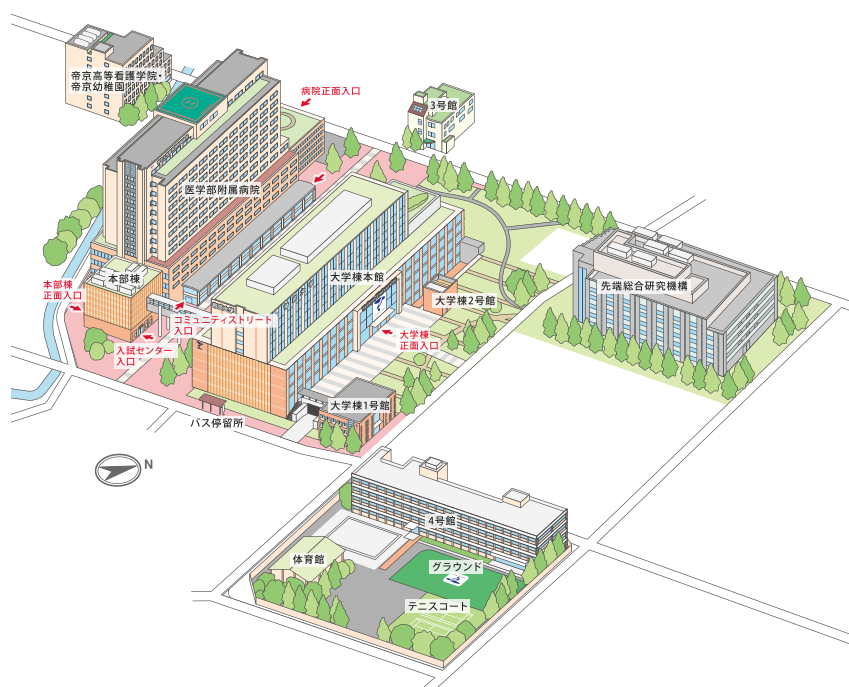
十条駅下車

JR 十条駅より徒歩 約10分

王子駅下車

JR京浜東北線「王子駅」下車

国際興業バス6番のりば → 板橋駅行10分「帝京大学病院」下車



学術の成果を社会と結び付けて共創社会を実現させる

帝京大学 先端総合研究機構

発行：帝京大学先端総合研究機構

東京都板橋区加賀2-21-1

2023年8月吉日発行



帝京大学 先端総合研究機構

〒173-0003 東京都板橋区加賀2-21-1

✉ acro-info@teikyo-u.ac.jp

🌐 <http://www.teikyo.jp/acro/>